

Title	戦後天皇「ご一家」像の創出と公私の再編
Author(s)	北原, 恵
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2014, 54, p. 25-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54053
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

戦後天皇「ご一家」像の創出と公私の再編

北 原 恵

第1節 占領期の正月新聞——天皇制の危機と揺らくジェンダー

はじめに

本稿は1945年から47年を中心に占領期の皇室の視覚表象をジェンダーの視点から歴史的に読み解くものである¹⁾。天皇像が激しく揺れ動いたこの時期、危機に瀕した天皇裕仁の身体像はいかなるものであったのか？占領期の正月新聞における天皇一家像と、新しく創出された一般参賀という装置に注目して主に新聞紙面で発表された写真などを中心に分析する。

一般に視覚イメージを分析する場合、その写真が、誰の注文を受けて、いつ、どこで、誰によって、どのように撮られたか、写っている人物や背景、発表に関しては、どのような媒体に、どのような状況下（検閲・管理など）で、いつ発表されたかなどは、当然念頭におくべき事柄である。本論では図像から何が読み取れるかを重視し、危機に瀕した天皇がジェンダーや年齢の境界を幾重にも錯綜させながら揺れ動き、やがて今日につながる正月の「ご一家写真」が登場する様子をたどりたい。というのは、あらかじめ定説とされている「神格化された軍服の大元帥（戦前）vs 人間的な背広姿の象徴天皇（戦後）」という図式で、戦前と戦後の天皇表象を分断することに疑問があるからである。これまでの拙論で検証してきたように、天皇一家は戦後をはじめて新聞紙上に登場したわけではない²⁾。新聞は附録や紙面を使ってことあるごとに天皇の家族を載せてきた。太平洋戦争下では戦局が苦しくなるにつれて、正月新聞は天皇が質素な食事を取りながら厳寒のなかで執務する様子を伝えた。多くの「国民」が飢えや寒さに苦しむ最中であっては、統率する威厳に満ちた大元帥や御真影の姿だけでなく、寒さなどの困難に耐える人間としての天皇の姿も求められたからである。

1) 本論文は、博士論文『「天皇ご一家」の表象——歴史の変遷とジェンダーの政治学』（2004年、東京大学総合文化研究科）の「第5章 創出された天皇一家の「プライベート」「パブリック」」に相当する。本誌掲載にあたって補論など削除し修正を行った。

2) 北原恵「元旦新聞にみる天皇一家像の形成」『性の分割線』（日本学叢書2）青弓社、2009年。

敗戦後初めての正月を迎えた1946年1月1日の『朝日新聞』紙面については、「第一面に神格化否定の詔書の中軸に硬質の政治的メッセージを、二面・三面に“人間天皇＝家族＝兄弟”という柔らかなメッセージを配し、これまでの「神話や非科学的な理念」にとりかこまれていた天皇制・皇室の変革を鮮やかに印象づけた」³⁾などと分析されることが多かった。だが、戦前の「神話や非科学的な理念」から、「人間天皇＝家族＝兄弟」像への移行と変革は、イメージの演出者たちの意図であって、分析者がそのままくり返す必要はない。むしろ求められているのは、「神格化否定の詔書」というこれまでの一元的な解釈を疑い、46年元旦の写真の何が「柔らかなメッセージ」を構成するのか、分析者も含めた読み手が「柔らかさ」を感じる根拠とは何なのかを問うことであろう。そうでなければ、皮肉なことに分析を詳細にすればするほど、演出者の意図は再言説化されてしまう危険性があるからである。

また、「GHQ対、天皇及び側近」の二項対立で占領下の表象を検証することにも疑問がある。ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』に代表されるように戦後体制が日米の合作であったことが最近の研究では共有されるようになってきた。「占領軍が威力を行使して撮った写真」と、宮内省や天皇側近が専属カメラマンに撮らせた写真を対抗的な表象としてとらえ区別することは、しばしば、「圧倒的な権力を握る占領軍に抵抗した天皇側近の気概」を強調し、天皇側近たちへの感情移入を促進することにもつながってしまう。もちろん天皇表象のすべてが日米合作であったわけではないが、「GHQ vs 天皇側近」の図式を前提とした表象分析は問題である。

天皇は、「人間化」をキーワードとして、あるときは女性化され「女々しく」「弱く」、あるときは好々爺に、あるときは生物学者や親米主義者に忙しく仮装するが、それは順を追って整合的に登場するわけではなく、同時に存在する姿である。また、敗戦直後には伊勢神宮への終戦奉告や議会での開院式に臨む新天皇服姿に見られるように、逆に「雄々しい」男性的な統率者のイメージも新たに創出されているのである。従来、GHQのがんじがらめの規制のもとで画一的であると思われてきた天皇のイメージは、占領下の正月に限って言えば、新聞社によってかなりのばらつきがあり、今日の正月新聞の方がはるかに画一的であるように思われる。

では、国体護持を最優先課題として求められた天皇の身体表象とはいかなるビジュアルとして提出されたのか。その錯綜性や亀裂、矛盾はどのように現われているのか。これまでの研究を踏まえたうえで主に『朝日新聞』『毎日新聞』と雑誌・写真集などメディアや侍従や側近の日記などを用いて読み直しをはかりたい⁴⁾。天皇の表象については、占領下だけでな

3) 坂本孝治郎『象徴天皇制へのパフォーマンス』山川出版社、1989年、p.97。

4) 天皇（皇后）の視覚表象に留意しながら論じた先行研究の主なものとして、坂本孝治郎（同前）のほか、佐々木克『幕末の天皇、明治の天皇』講談社学術文庫、2005年；多木浩二『天皇の肖像』岩

く、どの時期においても皇后や皇太子、その他の皇族の表象との連関から読み解くことに留意しなければならないが、本論では特に天皇の身体に焦点化して述べることにする。

（1）「新しい天皇服」という装置——背広と天皇服の二重制

① 新天皇服の制定

天皇は、戦後、軍服から背広姿に変身した——と信じられている。だが、彼は敗戦後ただちに背広姿に変わったわけではなかった。1945年11月、新たに制定し直された「天皇服」が存在するのである。マッカーサーとの会見写真が発表されてから40日後のことである。

従来の研究によれば、新天皇服のねらいは、「天皇にまつわる大元帥という軍国調のイメージをとり除くこと」や「御真影回収の理由」（岩本努）として説明されてきた⁵⁾。そして大半の研究では具体的な服装のビジュアルを分析することなく、新天皇服の果たした役目については議論の俎上にも上ってこなかった。「御真影回収」の理由は妥当性があるが、だが、はたして「大元帥という軍国調のイメージをとり除く」ためだったという解釈は妥当なのだろうか？あるいは、軍服から背広への過渡的な服装としてのみとらえることによって、天皇表象の問題を見逃すことはないだろうか？

新天皇服の制定について、当時の新聞は大きく報道した。たとえば、1945年11月8日の『朝日新聞』は、

「天皇陛下の御服はこれまで特定のを除くほか、陸軍式および海軍式に定められてゐたが、このほどこれを廃止し、新に天皇御服を御制定あらせられた、十二日の神宮行幸に際し初めて御召し遊ばされる由に承る……」⁶⁾

と述べ、新しい天皇服の形体や色を詳細に述べイラスト入りで紹介した【図版1】。この新しい天皇服は、深黒紺色の詰襟型で、襟元と袖などが菊の葉文様の刺繍で飾られており、軍帽のような帽子までつけられていた。その形は剣こそ携えなかったものの軍服そのものであり、戦前の「大元帥」の姿を彷彿とさせるものであった【図版2】。

波新書、1988年：タカシ・フジタニ『天皇のページェント』日本放送出版協会、1994年：吉見俊哉「メディア天皇制とカルチュラル・スタディーズの射程」花田達朗他編『カルチュラル・スタディーズとの対話』1999年：若桑みどり『皇后の肖像』筑摩書房、2001年：原武史『可視化された帝国』みすず書房、2001年、人文書院：加納実紀代『天皇制とジェンダー』インパクト出版会、2002年など。

5) 岩本努『「御真影」に殉じた教師たち』大月書店、1989年、p.269。

6) 「新に天皇服を御制定——詰襟型、御佩剣は用ひさせられず」『朝日新聞』（東京）1945年11月8日朝刊、第2面。『読売報知』でも11月8日（朝刊）第1面に挿絵入りで大きく紹介している。

天皇が公式に洋服を着用したのは、1872（明治5）年のことである。同年5月、天皇は大阪や中国・西国を巡幸した際に、初めて黒地に金線で菊や鳳凰を刺繍した正服と紺ビロード船形の帽子を着用した。同年9月に陸軍大元帥服、翌年には天皇のための「御軍服の制」が定められるなどの改定を重ねながら、陸軍式・海軍式の「天皇御服」は、儀礼服以外の公式の装いとしての役目を担ってきた。1913年（大正2）11月14日、皇室令「天皇ノ御服ニ関スル件」の制定によって、陸軍式御服、海軍式御服が定められた。男子皇族たちの服装も彼らの殆どが軍務についていたため、それぞれ陸海軍の服制に拠っていた⁷⁾。1944年元旦に「天皇陛下畏し御精励 大みいくさに日夜御軫念^{しんねん}」という見出しで掲載された天皇が、新しく制定された陸軍大元帥の野戦服を纏っていたように、基本的に当時の天皇の礼服は軍装である。そして、1945年8月の敗戦によって軍に関する勅令・軍令・省令が一切廃止され、軍服も消滅した。

1945年11月7日に「天皇御常用服」が制定されると、各新聞で大きく発表されたのであるが、新しい天皇服の制定はどのような意味を持っていたと考えられるだろうか？軍国調のイメージは取り除かれているのだろうか？

明治以降の天皇服のイメージの変遷をたどりながら比較してみると、1945年11月の天皇服は、彼がそれまでに着用していた旧来の陸海軍式の軍服と基本形はさほど変わることはない。昭和天皇裕仁の皇太子時代から大元帥にいたるまでの任官・昇任にともなう軍服正装姿を概観すると、1912年の陸海軍少尉、1914年の陸海軍中尉、1916年の陸海軍大尉、1920年の陸海軍少佐、1923年の陸海軍中佐、1925年の陸海軍大佐の服装へと移り変わっている⁸⁾。だが戦後の天皇服は、新しくなったとされる上着、袴、マント、帽、前章、襟章、袖章に、デザインや色に少し変化があるのみで、パーツの概念そのものは踏襲されたままである。大きな変化といえは直接的な武力を象徴する「佩剣^{はいけん}」の廃止であるが、天皇の身体を包む新天皇服は、基本的に軍服の形式を踏襲しているために依然として軍人統率者のイメージがまわりついている。陸軍式と海軍式の二種類に分けられていた天皇服は、新天皇服では両者を混ぜ合わせた形でひとつの服装に統合されているが、「詰襟で海軍の通常軍服のようなホック掛け」「帽子は海軍士官や、学生帽型の丸型⁹⁾」という上着や帽子もそれまでの海軍式に似ており、簡

7) 天皇服の歴史については、次を参照した。太田臨一郎「第三章 天皇御服」『日本服制史』中巻、文化出版局、1989年、pp.18-41；北村恒信「天皇の御服」『陸海軍服装総集図典——軍人・軍属制服、天皇御服の変遷』北村恒信編、図書刊行会、1996年、pp.219-242；井原頼明『皇室事典』富山房、1938年、pp.116-121；富樫準二『皇室事典』毎日新聞社、1965年、pp.59-63；中西立太『日本の軍装』（改訂版）大日本絵画、2002年；刑部芳則『明治国家の服制と華族』吉川弘文館、2012年。

8) 「肖像——軍服時代から背広の天皇へ」『アサヒグラフ増刊——天皇「昭和の50年」』11月15日号、1976年、pp.3-12は、公式写真として発表された10枚の肖像をグラビアとして掲載。

9) 前掲、『日本服制史（中）』（p.36）では、新天皇服のディテールを海軍の軍服のようであると描写しておきながら、「軍服臭のない御服」という矛盾した説明を行なっている。

素にはなったものの全体としては海軍服を引き継いだ印象がある。

では、なぜこの時期に急いで新しい天皇服を作らなければならなかったのだろうか？敗戦直後、側近たちはいち早く新しい天皇服について検討を始め、『高松宮日記』によれば、9月19日頃にはすでに内定していたようである¹⁰⁾。また当時、侍従次長に就任したばかりの木下道雄の10月31日の日誌には、昭和天皇が新天皇服や伊勢神宮行幸についてやりとりする場面が出てくる。木下は、天皇に昼前に拝謁して、12日の伊勢神宮行幸の際に、武官長・武官の服装が間に合わず用もないので供奉を免じるようお願い出て許しを受けたことを述べ、「陛下の御服装は新調の天皇服御着用のこと、御許あり。／聖上より天皇服製の制定公布はそれに間に合うや御下問ありたるにつき、間に合う見込みなる旨奉答す¹¹⁾」と、書き記している。この短い記述からは、おそらく軍人を天皇の行幸から切り離すために武官たちの服装が期日に間に合わないことを理由として挙げつつ、何をさておいても新しい天皇服を完成させ着用する決意であること、天皇自らも伊勢神宮への終戦奉告に間に合うのか気にしていることがうかがえる。そして翌日11月1日には、伊勢神宮を含む関西への天皇の行幸予定が新聞で発表された。

11月12日、天皇は伊勢神宮に終戦奉告するため、完成したばかりの新しい天皇服を着用し、翌13日の『朝日新聞』第1面に、さっそく東京駅を歩く写真が掲載された【図版3】。同様の制服姿の男性の侍従を付き従え、先頭をさっそうと歩く天皇の姿は、国民を統率する大元帥という敗戦前の視覚イメージの延長線上にある¹²⁾。13日に続いて14日にも「天皇御服に大勲位副章以下の各種勲章、記章を御佩用¹³⁾」した天皇の写真が新聞の第1面を飾った【図版4】。当時はどの新聞社の紙面も少なく、『朝日新聞』は2面のみであるから、この天皇写真の露出度は極めて高いことになる。天皇は、伊勢神宮に続いてその足で奈良と京都に向かい、「神武天皇畝傍御陵」と「明治天皇桃山御陵」に終戦奉告と再建祈念のために「親拝」した。この行幸の随員は天皇の地方巡幸としては人数も少なく、木戸幸一、藤田尚徳（侍従長）、石渡荘太郎（宮内大臣）^{いしわた}が付き添っただけである。

関西の行幸から東京に戻るとすぐ、11月20日に天皇は靖国神社「臨時大招魂祭」に赴き、

10) 高松宮宣仁親王『高松宮日記』第8巻、中央公論社、1997年、p.154（9月24日の日記）。

11) 木下道雄『側近日誌』文藝春秋、1990年、p.20。

12) 「天皇陛下伊勢に行幸——畏し戦災の民草に大御心」『朝日新聞』（東京）1945年11月13日朝刊、第1面。新しい天皇服を着て国民を統率するさっそうとしたイメージは、『朝日新聞』では成功しているが、『読売報知』では必ずしも成功したとは言えない。なぜなら、そこに映し出された天皇は、東京駅で侍従のあとを同様のポーズで歩く姿であるため、統率者のイメージはないからである。そのため、侍従の身体を半分カットしているが、写真としても中途半端な図像になってしまっている。（「天皇陛下関西行幸 きとう東京を御発輦」『読売報知』1945年11月13日、第1面）

13) 「伊勢の神宮御親拝——畏し・終戦を御奉告」『朝日新聞』（東京）1945年11月14日朝刊、第1面。

翌日さっそく写真が発表された【図版5】。つまり、マッカーサーと天皇の会見写真が新聞に掲載されて以来、『朝日新聞』に天皇が姿を現わすのはこの新天皇服を着用した写真が初めてであり、しかも、その後わずか10日足らずの間に3回も写真が登場したことになるのである。1945年1月1日から1年間の間に、天皇の身体に見える写真——遠景の鹵簿ではなく——が朝日新聞に掲載されたのは、合計9回であるから、いかに新しい天皇服姿のビジュアルが大きな意味をもっていったかが推測されるだろう。9回の写真掲載とは、最高戦争会議(1/1)、陸軍始観兵式(1/9)、戦災地巡幸(3/19)、靖国参拝(4/29)、マッカーサー会見(9/29)、伊勢行幸へ向かう途上の東京駅(11/13)、伊勢神宮での終戦奉告(11/14)、靖国神社参拝(11/21)、開院式での勅語(11/28)である。11月27日に貴族院で行なわれた第89回臨時議会議開院式を報じる紙面では、真新しい天皇服を着用して勅語を読む天皇に構図上焦点化した写真が大きく発表されている。天皇が臨席する帝国議会議開院式全体の写真が新聞に登場したのは、この時が初めてである¹⁴⁾。

ここで、先ほどの疑問に戻ってみよう。なぜこの時期に急いで新しい天皇服を作らなければならなかったのか？直接的な理由としては、まず間近に迫った伊勢神宮への終戦奉告に間に合わせる事が挙げられるだろう。だが、タキシードでも背広でもなく、儀礼服でもない軍服調の抜け切らない天皇服がなぜ必要だったのだろうか？当時の天皇制をめぐる政治状況のなかに、伊勢神宮や靖国神社の「親拝」などを位置づけることによって、天皇制維持・国体護持のために求められていた天皇の身体表象の像を探ることはできないだろうか？

② 天皇の身体表象の矛盾——1945～46年

1945年8月15日の無条件降伏発表の後、マッカーサーが厚木飛行場に降り立ち戦勝者による軍事占領が始まるまでの間に、天皇は陸海軍人に勅諭を出している。8月25日の「陸海軍人ニ賜リタル勅諭」である。この勅諭のなかで天皇は、「汝等軍人其レ^よ克ク朕カ意ヲ体シ忠良ナル臣民トシテ各民業ニ就キ^{かんく}艱苦ニ耐^{けいきよく}へ荆棘ヲ拓キ以テ戦後復興ニ力ヲ致サムコトヲ期セヨ」と述べ、統帥大権を持つ大元帥の立場で軍隊解体と復員を指示した。軍隊解体の命令を占領軍によってではなくまず天皇自ら行うことによって、指導力を示すためである。その5日後、マッカーサーが日本占領管理の最高責任者として厚木に到着。9月2日には降伏文書の調印が交わされ、翌3日、天皇は宮中賢所、皇霊所、神殿において「戦争終結親告の儀」を執り行った。当時、天皇の戦争責任追及に関する各国の世論は厳しいものであった。よく知られているように、アメリカのギャラップ社の敗戦直前(6月)の世論調査では、天皇を「処刑する」が33%、「終身刑にする」11%、「追放する」9%、「裁判で決める」17%という天皇

14) 前掲、坂本孝治郎『象徴天皇制へのパフォーマンス』p.53.

に不利な結果が示されていた。また、終戦後（9月18日）にはアメリカ上院合同委員会が、「日本の天皇裕仁は戦争犯罪人として裁判を受けるということを合衆国の政策とする」と決議し、アメリカ、中華民国やオーストラリアは戦争犯罪人リストに天皇・裕仁を掲げるなど、天皇制は極めて危機的な状況のなかにあった。

では、日本の軍組織はどうだったのだろうか。天皇の隷下に設置され最高統帥機関であった大本営は、9月13日、GHQの指令によって廃止された。10月10日、連合艦隊と海軍総司令部が正式に廃止されたのに続いて、10月15日の参謀本部と軍司令部も廃止される。そして12月1日の陸軍省と海軍省の廃止にいたって軍組織は解体され、その頂点に君臨していた大元帥天皇の基盤は完全に崩れ去った。一方、10月4日にはGHQの「政治的・民主的・宗教的自由ニ対スル制限ノ撤廃ニ関スル覚書」によって、治安維持法や思想犯保護観察法、予防拘禁令、国防保安法、軍用資源秘密保護法、軍機保護法、宗教団体法などが撤廃され、東久邇内閣は総辞職し、同月10日、大量の政治犯が釈放された。このように「国体」を維持するための言論・思想・情報への弾圧装置が解体されると同時に、GHQは東京の5大新聞の事前検閲を開始して、占領下の情報操作を開始する。10月11日、12日に天皇裕仁と側近たちが、11月中旬に伊勢神宮から始まる神武・明治天皇陵への「親拝」と、靖国神社への最後の公式参拝を行ない、「宗教的権威」としての存在を前面に押し出そうとしたのは、このような天皇制国家機構の主要部分が次々と解体されるという緊迫する政治日程の最中であった。

伊勢神宮への行幸については、敗戦後すぐに侍従たちの間で相談が始まっていた。鈴木しづ子の研究によれば、「早くも八月二三日には近衛と木戸との間で、翌二四日には石渡宮相と木戸との間で、伊勢神宮参拝についての相談がなされ」、9月6日に天皇は掌典を勅使として伊勢に派遣し戦争終結の「奉告」を行なったという¹⁵⁾。しかし、天皇自身による伊勢参拝を何としても行なうために、木戸幸一と石渡宮相たちはGHQに問い合わせ「好意的な回答」を得、天皇の私事として許可されることになった。11月12日に東京を出発した一行は、心配していた天皇への反感や暴力にもあわずに伊勢に向かい、内宮齋館に宿泊、翌13日には伊勢神宮の外宮・内宮を参拝した。その足で急いで京都に向かった天皇たちは、13日夜京都大宮御所に宿泊し、翌日畝傍の神武天皇山陵と、京都桃山の明治天皇陵をあわただしく訪れて参拝をすませ、15日に東京へ戻った。

伊勢神宮を起点に始まった神武・明治天皇陵への親拝の道程は、一見、天皇の個人的な先

15) 鈴木しづ子「天皇行幸と象徴天皇制の確立」『歴史評論』no.298、1975年2月、pp.58-59。本論の元となった博士論文執筆後、瀬畑源「昭和天皇「戦後巡幸」の再検討」『日本史研究』573号、2010年5月が発表されたが、その政策論を中心として「終戦奉告行幸」を分析した成果は視覚表象を中心とした本論では生かすことができていない。瀬畑の公文書を用いた占領期の解明には教えられることが多く今後の課題としたい。

祖の墓への参拝であるかのようにも見えるが、実は「皇祖皇宗」の起源とされる天照大神から、「初代天皇」の神武を経て自らの祖父にあたる明治天皇の墓を参ることによって「万世一系」の「国体」の論理を可視化するものでもあった。これらの一連の巡幸は、「敗戦後における、靖国神社をめぐる、新たな「宗教的権威」を形成するための周到に準備された国家イベント」¹⁶⁾(小森陽一)であり、衣替えしつづも「国体」を護持し続ける天皇像を国民に見せる機会でもあった。しかし同時に天皇に触れた民衆がどのように反応するのか、侍従たちは心配しており、伊勢に到着するまでの間、「お召し列車」が停車駅に止まるごとに彼らは自信を回復していき、行幸の成功を確信していったといわれている¹⁷⁾。供奉した木戸幸一は、民衆の歓迎振りとは安堵を11月12日の日記に、「沿道の奉迎者の奉迎振りは、何等の指示を今回はなさざりしに不拘、敬礼の態度等は自然の内に慎あり、如何にも日本人の真の姿を見たるが如き心地して、大に意を強ふしたり」¹⁸⁾と書き残した。木戸は、無事に関西での旅程を終えた11月15日の短い日記にも、「斯くて無事御親拝を終らせらる。真に幸慶なり。臣民の態度掬すべきものあり。大に安心す」と記しており、逆に文面からは行幸に際してどれほどの不安を抱いていたかが測られる。

関西の巡幸から東京に戻ったばかりの昭和天皇は、11月17日大正天皇の眠る多摩陵にも終戦奉告のため行幸している。そして、20日には靖国神社で臨時大招魂祭に臨んだ。前夜の招魂式では、敗戦によって政府が戦没者を靖国に合祀するのが困難となったため、満州事変以後の未合祀者で、将来靖国神社に合祀されるべき「英霊」を一度に招魂するための儀式が行なわれていた。この臨時大招魂祭の様子を靖国神社は次のように描写している。

「敗戦により、今後、政府が戦没者を靖国神社に合祀するのは極めて困難となった。そうした中、昭和20年11月19日夜、満州事変以後の未合祀者で、将来靖国神社に合祀されるべき英霊を一度に招魂する招魂式が営まれた。祭典委員長は、ミズーリ号で降伏文書に署名した最後の参謀総長・梅津美治郎大将が任命された。

翌日午前9時からの臨時大招魂祭には、幣原首相と各閣僚、在京陸海軍部隊代表などのほか、遺族1000人ほどが参列。同10時15分、天皇陛下が招魂斎庭で御親拝になり、皇族方も続いて拝礼された。この日の祭典をみた、GHQ民間情報教育部長ダイク准将は、靖国神社の儀式が厳肅、平和裡に行なわれたことに感銘した。」¹⁹⁾

16) 小森陽一『天皇の玉音放送』五月書房、2003年、p.140.

17) 田中伸尚『ドキュメント昭和天皇：第7巻 延命』緑風出版、1992年、pp.231-233.

18) 木戸幸一『木戸幸一日記(下)』東京大学出版会、1989年、p.1249.

19) 靖国神社・やすくにの祈り編集委員会編『やすくにの祈り』日本工業新聞社、1999年、p.166.

GHQのダイク局長は、学習院のR.H.ブライスを仲介にして、昭和天皇自身が自らの神格を否定するメッセージを発表するように働きかけていたと言われているが、臨時招魂祭でダイクが「感銘した」かどうかの真偽はさしおいても、裕仁に対しては戦争責任を追及させないという一点で彼らの論理は重なっていた。重要なのは、この時点では、昭和天皇は現人神であり、帝国陸海軍も12月1日の廃止を目前にしながらも、まだ残存している状況だったことである。「玉音放送」を中心として敗戦前後の天皇の言説・表象を検証した小森陽一は、現人神であった天皇による11月20日の靖国神社参拝の意味を、「彼らの死が「国体護持」のためのものであったということを証明する形で、ヒロヒトは戦争で死んだ将兵に対して、大元帥であると同時に、靖国神社の祭司として、「責任」を果たしている」²⁰⁾と論じている。つまり、11月20日の靖国参拝とは、12月15日に出される「国家神道に対する政府の保証、支援、保全、監督並びに弘布の廃止」に関する指令を前にして、宗教的権威の構築を「ぎりぎりのすべり込みで実現」（小森）し得たのであった。

昭和天皇は明治・大正天皇と比べると、靖国神社へ参った回数が極めて高かった。明治天皇は7回、大正天皇は2回、これに対して昭和天皇は28回である²¹⁾。1927年から1945年までに行なわれた軍事儀礼への天皇行幸を分析した坂本孝治郎の調査データ²²⁾を見ると、大元帥として臨んだ靖国神社臨時大祭への「親拝」の回数は、1937年を境に急増し、日中戦争が本格化してからは春秋に催される臨時大祭を毎年訪れていることがわかる。そして、これらは大元帥として軍服を着用しての行幸であった。1945年11月の靖国「親拝」でも、裕仁は天皇服を着用していた²³⁾。

「万世一系」を自らの身体を使った行幸というパフォーマンスを通じて視覚化し、「大元帥であると同時に、靖国神社の祭司」として身体を露出する必要に迫られた天皇裕仁は、それ

20) 前掲、小森陽一『天皇の玉音放送』p.220.

21) 靖国神社監修、所功編『ようこそ靖国神社へ』近代出版社、2000年、p.99:高橋紘『象徴天皇と皇室』小学館文庫、2000年、pp.212-213. 靖国神社への歴代天皇の「親拝」は、次の通りである。

明治天皇——①明治7年 1/27 ②同8年 2/22 ③同10年 11/14 ④同28年 12/17 ⑤同31年 11/5
⑥同38年 5/4 ⑦同39年 5/3 ⑧同40年 5/3 (名代は⑥)

大正天皇——①大正4年 4/29 ②同8年 5/2 ③同9年 4/29 ④同10年 4/29 (名代は③④)

昭和天皇——①昭和4年 4/26 ②同7年 4/27 ③同8年 4/27 ④同9年 4/27 ⑤同12年4/27 ⑥同13年 4/26 ⑦同年 10/19 ⑧同14年 4/25 ⑨同年 10/20 ⑩同15年 4/25 ⑪同年 10/18 ⑫同16年 4/25 ⑬同年 10/18 ⑭同17年 4/25 ⑮同年 10/16 ⑯同18年 4/24 ⑰同年 10/16 ⑱同19年 4/25 ⑲同年 10/26 ⑳同20年 4/28 ㉑同年 11/20 ㉒同27年 10/16 ㉓同29年 10/19 ㉔同32年 4/23 ㉕同34年 4/8 ㉖同40年 10/19 ㉗同44年 10/20 ㉘同50年 11/21 (名代はなし)

22) 前掲『象徴天皇制へのパフォーマンス』p.9「表2 軍事儀礼への天皇行幸」を参照。

23) 『朝日新聞』（1945年11月21日付け）の「靖国神社御親拝」の記事には、「天皇陛下には天皇御服を召させられ……」の記述がある。

ゆえにこそ、陸軍式と海軍式を混ぜ合わせたスタイルでありながらも、「軍服ではない」という二重性を帯びた奇妙な服装を身に纏わなくてはならなかった。新しい天皇服用にあたって剣を身につけなかったように、生き残った軍部首脳は野蛮な「剣」、すなわち戦犯として、天皇の身体から切り離された。しかも、「靖国親拝」は、GHQからは「私事」として許可されていたが、天皇服を着ることによって公性をアピールすることを可能にしたのである。冒頭で紹介した新天皇服制定の報道は、「神宮行幸」という言葉を使用し、伊勢行きが決して「私事」ではないことを暗黙裡に伝えている。そのように考えると、11月8日に新聞で新しい天皇服の制定が発表され、伊勢神宮での着用が予告されたこと自体がすぐれて政治的な出来事であったことがわかるのである。

つまり、新天皇服の制定とは、それを当初から意図したかはわからないが、結果として敗戦後も裕仁の身体を中味とした天皇制が存続することの宣言であったと言えないだろうか。天皇服が制定されるためには、当然その前提として生きた身体を持つ天皇の存在がなくてはならないからである。それは「佩剣」の廃止で象徴化される「悪い軍首脳部」の除去であり、また伊勢神宮などへの巡幸での着用予告は、敗戦後も存続し続ける天皇が「万世一系」の象徴的身体であることの宣言でもあった。さらに側近たちはマッカーサーとの会見写真によって損なわれた天皇の権威の回復に貢献することも期待していたかもしれない。新天皇服は、決して過去の軍人天皇のイメージの残滓などではなく、この時期の天皇の身体を包むためにこそ必要とされた矛盾に満ちた苦肉のイメージだった。そうであるならば、各新聞が伝えた、新しい天皇服のデザインや生地などの事細かな報道は、些末なこととして片付けるわけにはいかなくなるだろう。本章冒頭で引用した『朝日新聞』の記事は、次のように続いている。

「新しい御服は深黒紺色の詰襟型で御佩^{はい}剣用ひさせられず、御上衣には黒の笹縁があり、御襟の御料章は黒の御紋章、襟、前側の襟下と下部および御袖に黒の菊枝模様各一枝の刺繍があり、御帽子は丸型で御帽章は金色の御紋章の左右に菊枝の抱合せが配されている。

なほ皇族以下の御服装も御服に準じて改正されたが、帽章と料章が御紋章に代つて十四葉裏菊となつてゐる。」²⁴⁾

新天皇服のディテールの描写は、ファッション用語をふんだんに使うことによって、一見「政治」の領域とは無縁に見えつつも、服の細部を読むことを通して、読者が新たな天皇の身体を具体的に想起できる仕掛けになっている。服の描写は詳細であればあるほど、不安定な行

24) 前掲、「新に天皇服を御制定」『朝日新聞』1945年11月8日朝刊、第2面。

方知れない「国体」の身体を実像化することができた。生地の子質や色彩の描写は、視覚イメージだけでなく肌触りまで伝えるものである。天皇の中味はなくても、身を包む外側の新しい衣服を見せることで、衣替えをした天皇制の継続を示すことは可能だった。「ファッション」という領域の言説は、その政治性を覆い隠す機能を果たしていた。この記事には、同じ囲みのなかで、「皇太子殿下 疎開地から還啓」の記事が続いている。新しい天皇服の制定と発表は、天皇だけでなく皇太子や皇族の存続と安定をうたい、天皇制の護持と新たな体制の、イメージの上での構築のために作用したと言えるのではないだろうか。だが同時にそれは、言説と視覚イメージにおいて、男性性と女性性の間を揺れ動く不安定で危険に満ちた表象でもあった。

これまで占領期の新しい天皇服については、研究者たちの間でも議論されることはほとんどなかった。明治期の天皇の巡幸や視覚表象をめぐる豊富な先行研究が存在するにも関わらず、一般にファッションの政治性を軽視してきたことや、敗戦後のダイナミックに揺れ動く狭義の政治性に目を奪われたこと、しかも男のファッションというジェンダーバイアスによってますます周縁化されたことなどから、占領期の天皇の表象研究からも抜け落ちてきたと考えられる。もちろん、この時期の天皇の表象を新しい天皇服のみから論じることができないのは言うまでもないが、「軍服から背広へ」という単純な移行ではなかったことは明らかである。戦後の新しい天皇服の忘却に向けた言説化が積み重ねられてきた事実をふまえ、天皇服という装置に着目することによって、当時の天皇表象の矛盾や亀裂を読み解くことが可能となるだろう。

③ 新天皇服の御真影の下賜

さらに、新天皇服については新聞で新しい天皇服を着用した昭和天皇の写真を発表するだけにとどまらなかった。1945年11月24日、宮内省は戦前からの「御真影」に代わってこの新たな天皇服姿の御真影を学校・官衙に「下賜」することを新聞を通じて発表している。

「各級学校を始め、都道府県庁、在外大使館及び領事館において奉戴してゐる天皇陛下の御真影は終戦後の新事態に鑑み、今回変更されることに決定した、すなわち、現在の御真影は一般に御軍装に桐花大綬章御佩用の御肖像であるが、平和日本の建設期に当つては不適當なりとされ、かねて石渡宮相を中心に宮内省当局で慎重考慮中のところ、今回新しき天皇御服の制定を機として新しい御真影を謹製することに方針を決定、過ぐる伊勢神宮御親拝直後、宮内省より内閣に対し、各方面にある現在の御真影の返納方を通達した、御軍装に代つて天皇御服を召された御真影の調整は宮内省写真部によつて行はれるが、来年早々から関係方面へ下賜されるはずである（…略…）」

石渡宮相謹話 畏れ多いことながら、かゝる時代には現在の御眞影は不適當と拝察され、天皇御服の制定の時から新しい御写真と御替へすることに方針を決定したわけです²⁵⁾ (『朝日新聞』)

つまり、新聞記事によれば、各級学校を始め、都道府県庁、在外大使館及び領事館等において飾られている「現在の御眞影は一般に御軍装に桐花大綬章御佩用の御肖像であるが、平和日本の建設期に當つては不適當なりとされ」たために、翌年早々から関係方面へ新たな御眞影を「下賜」する予定だというわけである。直前に行なわれた伊勢・京都・奈良、靖国神社、多摩陵での行幸で手応えをつかんでいたのであろう。同年末12月20日、文部省は地方長官への通達「御眞影奉還に関する件 官三〇号」によって、旧眞影の各地方庁への返還を命ずると同時に、将来、御眞影が新しい天皇服の写真に取り替えられることを伝え、御眞影の「奉還」と、46年元旦の学校儀式での「捧掲」禁止を指示した。

御眞影の回収にあたって文部次官が各地方長官に送った通牒には、「天皇御服制定ニ伴ヒ曩ニ貴管下各学校ニ下賜ノ今上陛下御眞影ハ将来新制定ノ御服装ニ改メラルベク」と述べられ、あくまで表向きは新天皇服制定が理由とされた。御眞影回収に伴う権威失墜を防ぐための口実である。岩本努の研究によれば、御眞影の返還は翌年1月以降が多く、返還するときに来賓を集めて「奉還式」をやった例までであるという。岩本の紹介する千葉県の国民学校の例では、校長が、御眞影を返却するのは「魂ヲ奪ハレル様ナ気持ち」がするが、新しい天皇服の写真を下賜してもらつつもりだと訓話をしている²⁶⁾。新天皇服という装置は、単なる口実だけでなく、御眞影回収に伴う心理的な喪失感をも補償したようである。だが、戦後初めての天皇皇后の新しい写真の「下賜」は、結局1946年の新憲法公布まで待たねばならなかった。

その後天皇は、地方巡幸においては積極的に背広姿をアピールしたが、天皇服に関しては伊勢神宮や靖国「親拝」での着用のみで終わったわけではない。議会という政治の場面においても天皇服を着用し続けているのである。1945年11月27日、第89回臨時議会の開会式で勅語を読む天皇の様子を新聞は、簡素さと威厳を強調しドラマチックに描写して伝えた。翌年6月20日の開院式でも、『毎日新聞』は天皇の威厳を強調する報道を次のように行なった。

「なほ今回の勅語では朕といふ語も御使用あらせられず、文体も従来の形式とは全く異つたやさしい口語体であつたが、これをお読みになる陛下の御態度はいつもの地方御巡

25) 「新御服の御眞影——学校・官衙へ改めて下賜」『朝日新聞』(東京) 1945年11月24日朝刊、第2面。

26) 前掲、岩本『「御眞影」に殉じた教師たち』、p.273。

幸で拝するやうな背広姿のおやさしさと変つて天皇服の御姿にも歴史的な議會開院の厳肅さがさながら現れてゐたやうで……」²⁷⁾ (傍点は引用者)

ここでは、背広姿や勅語の口語体の「やさしさ」に対して、天皇服を着た天皇の態度を「いつもの地方巡幸で拝するやうな背広姿のおやさしさと変つて」と述べて差異化し、新しい憲法案を審議する議會開院の歴史的な「厳肅」さを強調している。背広と天皇服の共存は、翌1946年11月3日、新憲法公布に際しても継続し、貴族院本会議場での公布にあたって彼は天皇服を着用して臨んだ。そしてこの日、戦後初めての天皇皇后の新しい写真の「下賜」が発表されたのであるが、それは、洋装の皇后と天皇服姿の天皇だった。新憲法が公布された11月3日の『毎日新聞』第1面は、憲法公布の記事とともに、新しい御真影を大きく写真入で発表している【図版6】。「平和日本の象徴——民主的お姿の両陛下」という囲み記事は、新しい写真の下賜について次のように伝えている。

「陸海軍軍装のいかめしい「御真影」が官衙学校から姿を消して一年、平和日本国の象徴たる天皇の民主的なお姿として天皇御服常装に大勲位副章をつけられた天皇陛下とひわ色絹の通常服を召された皇后陛下の和やかなお寫眞がその御下賜範囲と共に新憲法の意義深いけふ三日宮内省より公表された、このお寫眞は終戦後初めて一般にお貸下げになる寫眞であるが希望する向は関係官庁を經由して宮内省に願書を提出すれば近く下賜される」²⁸⁾

つまり、「いかめしい」陸海軍軍装とは異なる新しい平和日本の象徴の民主的姿として、天皇服を全面的に打ち出したのである。そして、新しい写真は「下賜」の範囲を大幅に拡張させ、願い出れば有力者はほとんどもらえるばかりか、複製もプロマイドのように売られるようになるという。記事は次のように続く。

「その範囲も団体では新たに都道府縣市會、商工會議所、少年救護院、社會事業團體、一般會社工場等が加へられ、個人では文化勲章拝受者、宗教團體主管者、都道府縣市會議長、商工會議所會頭、褒章受領者、社會事業功勞者、市長、多年勤続の町村長等に拡張されたほか特に詮議された希望者にも下賜されることになつた。またお寫眞の複製頒布については近く商人が指定される筈で陛下のプロマイドが店頭に飾られるのも間近いであらう」(傍点は引用者)

27) 「民主議會開院式に行幸——口語體の勅語を賜ふ」『毎日新聞』(東京)1946年6月21日朝刊、第1面。

28) 「平和日本の象徴——民主的お姿の両陛下」『毎日新聞』(東京)1946年11月3日朝刊、第1面。

だが、現実には新天皇服を着た「陛下のプロマイドが店頭に飾られる」ことは、起こらなかった。皇室のプロマイド化は、その後のテレビ・女性週刊誌という新しいメディア空間の誕生を背景として、1950年代末に巻き起こったミッチー・ブームと皇太子成婚まで待たなければならなかった。

天皇服の制定や御真影の下賜計画の目的は、天皇の軍国的イメージを払拭し、「御真影」に対する侮辱やそれに伴う天皇の権威失墜を防ぐために、あらたな天皇服姿の写真の「下賜」を理由にして戦前の「御真影」を回収したかったためであると言われてきた²⁹⁾。あるいは、天皇服については議会の開院式でも取り上げられるなど批判が相次ぎ評判が悪かったと言われてきた³⁰⁾。確かに御真影の回収の理由として新天皇服は格好の口実であった。だが、大元帥イメージを継承するあらたな天皇服や御真影の下賜の理由として、それらの説明だけでは危機に瀕して揺れ動く天皇イメージの矛盾や錯綜を解き明かしていないだろう。この戦後しばらくの間、背広姿と共存した新天皇服姿は記憶から忘れられ、「軍服から背広へ」すぐさま天皇が衣替えしたかのように言説化されていくのである。

そして、この天皇服と使い分けながらも、決定的に新たな表象をともなって天皇が登場するのが、翌1946年の元旦だった。

(2) 1946年「人間的な天皇」像と、性差の攪乱

① 1946年元旦、「人間宣言」と写真

1946年1月1日、敗戦後初めての正月、天皇や彼の家族はどのように表象されたのだろうか。一般に「人間宣言」と呼ばれる「年頭の詔書」において、「然レドモ朕ハ爾^{ナンヂ}等国民ト共ニ在リ」と語り、現御神^{あきつみかみ}ではないと述べつつ、万世一系の天皇を中心とする大日本帝国憲法の国体概念を守ることを宣言したこの日、天皇はどのように視覚化されたのであろうか。占領史研究によれば、連合国軍総司令部は46年の元旦に天皇制を存続させる方針を決めそれを昭和天皇も知っていたと言われているが、1945年12月15日の「神道指令」による国家と神道の分離命令や、1月4日の軍国主義者の公職追放、超国家主義団体解散の指令など緊迫した情勢のなかで天皇制の行方を見ていた一般国民に対して発表された「人間・天皇」とは、いかなる表象であったのか。

宮内省が、元旦の詔書の意義を視覚的に印象づけるために新聞社に提供した写真は、天皇

29) 前掲、岩本『「御真影」に殉じた教師たち』pp.267-268。佐藤秀夫「解説」『続・現代史資料8——教育I』（佐藤秀夫編）みすず書房、1994年、p.21。

30) 河原敏明『天皇裕仁の昭和史』文藝春秋、1983年、p.239。

と女性の家族だけを写したものだ³¹⁾。

たとえば『朝日新聞』では、剣の代わりにステッキを持つ背広姿の天皇とスーツを着た三女・孝宮を写したツーショット写真の一枚と、鶏の世話をする皇后と三人の娘たち（孝宮、順宮、清宮）の一枚を掲載した【図版7】。この年、天皇は46、皇后44、孝宮18、順宮16、皇太子14、義宮12、清宮8、皇太后63歳である。写真の天皇と孝宮の全身には前方から日光が当たり、右後方へと影が地面に伸びて、二人の身体に明るさと構図の安定感が引き立っている。影の長さから推測すると昼頃の撮影であろうか。皇太子と義宮の男子が姿を見せていないことも注目される。これが構成メンバーから見ても、戦前の元旦写真と全く異なることはもちろんであるが、それ以降の元旦写真とも決定的に一線を画する図像であり、様々な矛盾を含みながらジェンダーを軸に表象されていることが分かるだろう。

第一の特徴は、散歩をして家族と過ごす私的な日常風景の一コマを写したという設定の、スナップ風の体裁を取っていることである。それは、やがて1950年代に定型化される「天皇の私的なご一家像」というイメージに繋がるものである。第二の特徴は、天皇と家族（この場合は娘）が、それぞれ縁取りされ個別化されるのではなく、同一空間のなかに描かれていることである。このことは、戦前の正月新聞に見られた時間の静止した御真影の天皇・皇后と成長する子どもの組合せをやめ、ともに現在を生きる家族の肖像として描かれ始めたことを意味している。元旦写真は「家庭」の情景を全面に提示することになったのである。

さらに、第三の特徴は、同一紙面のなかで、天皇が女性の家族のみと描かれていること。この場合、女性は「国民」のメタファーである。第四は、女性の家族のみと共に描きつつも同時に、女の性別役割分担に従事する女性家族を天皇の領域からは視覚的にも切り離していることである。戦前、昭和天皇が女性のみと同一空間にいる写真が発表されることはあまりなかった。戦前の元旦としては最後となった1945年1月1日の写真でも、最高戦争指導会議に臨む天皇といっしょに写っているのは、当然ながら男性の指導者だけである。45年だけに限ってみても、その後、新聞に登場した天皇の写真は、陸軍始観兵式であれ（1月9日付）、焼け野原となった戦災地の巡幸であれ（3月19日付）、靖国神社への参拝であれ（4月29日付）、新たな天皇服での伊勢神宮の参拝であれ（11月13日、14日付）、同一の画面に写っているのは、すべて男性である。このように、彼を取り巻く空間のジェンダーは厳格に区分されていた。では、46年のこの元旦写真はどのように分析できるのだろうか。

まず、一枚目の天皇と孝宮とのツーショット写真であるが、横に並びながらも孝宮よりも

31) 1946年元旦の新聞に掲載された写真は、1945年のクリスマス前の日曜日に撮影され、12月22日の宮内庁詰記者団の初の「天皇拝謁」にちなんで、宮内省から年末に配布された。（前掲、坂本孝治郎『象徴天皇制へのパフォーマンス』p.92）

少し先を歩く天皇の姿は、娘よりもはるかに大きく撮られている³²⁾(【図版8】。(正確に言えば、天皇の右手後方にワンピース姿の清宮が小さく写っているが、ここでは天皇と孝宮のツーショットとして扱う。)二人の身体の大きさの違いを強調するためか、画面右手に写る天皇の側から見上げるようにアオリで写真が撮られていることが分かる。また、娘と並びながらも天皇は娘を見るわけではなく、前方を向いているに対して、孝宮は天皇のいる右方向に視線を送っているため、このツーショットの写真において焦点化されるのは、天皇ひとりとなっている。それは、まるで三ヶ月月前のマッカーサーとの会見写真を意識したかのような構図である。この元旦写真では、マッカーサーとの写真の構図と同様に天皇を向って右手に配しながらも、娘と並ばせることによって天皇の威厳を損なわせないことに成功しているのである。戦前の御真影を思い起こさせずに人間化した天皇像を強調するために、御真影で対となった皇后ではなく、明らかに力の弱い娘と並ぶことが選ばれたのではないか。前述したように、宮内省はすでに古い御真影を回収し、新天皇服の御真影を近く発表・下賜することを予告しているため、元旦の写真で天皇と皇后が対になって登場すると、新しい御真影と齟齬をきたしかねないのである。

このように天皇と孝宮のツーショット写真は、男性としての性差の境界を引き直すことに成功しているが、この紙面のなかに表象された天皇のジェンダーは「男性化」だけに向かったのではない。それは記事である。元旦の新聞は、天皇に記者団が「拝謁」したときの様子を写真とほぼ同じ分量の紙面を使って描写している。記事のなかで「人間・天皇」がどのように語られているのか、少し長くなるが全文を引用しながら検討してみよう。まず、記事は12月22日に吹上御苑で17名の記者たちが天皇に「拝謁」した事実を述べることから始まる。

「師走二十二日、宮内省詰の記者團十七名は吹上御苑において天皇陛下に拝謁、親しくお言葉を賜はつた、わが國の新聞史上、いな宮中の前例においてもかつてなき稀有のことに属する、この日お召にあづかつた本社員は杉浦、藤井、白井、柴田の四記者であるが、大内山の奥ふかく『人間・天皇』を拝した印象を、素直にかき綴らう——」

戦争に敗れたとは言え、記者が天皇に直接会うことなど考えられなかった時代に、アメリカ人記者たちの会見記事はすでに9月、マッカーサー会見写真とともに日本の新聞で発表されていた。元旦の記事中では、日本で記者が天皇に拝謁するのは新聞史上初の出来事ということを強調した上で、「人間・天皇」というキーワードを印象付けている。

32) 天皇の左後方に小さく女の子が写っているのが見えるが、服装・髪型から清宮であるとも考えられる。

「昔は美しいお庭であつたにちがひないこの吹上御苑が、いまは見るかげもなき荒涼たる武蔵野の原野にすぎない、それが第一に私の目にした意外なおどろきであつた向ふの木立の間から、落葉をふむ陛下の足音がきこえてきたと思ふと陛下のお姿が突如として思ひがけない近さに現はれた

私たちがそろつてお辞儀をしたので陛下は歩みを止められた、そして帽子を脱いで、きはめていねいな答禮を返された、やがておつきの三井侍従が十七名ゐた記者團一人々々を何新聞の誰々と名前をよんで御紹介申しあげた、陛下は一人々々の前に立留まられ私たちの敬禮に対しいちいちお頭をさげてこたへられた、しかもその御挨拶はうなづいたり、あるいは軽く會釈される程度ではない、鼠色ソフトのお帽子を片手に、おそれおほいことながらお腰のあたりから上半身をふかく前にかゞめられ、きはめて慇懃なお辞儀を賜はるのである、私の順番がきたとき小路が狭かつたので向ひあつた龍顔は三尺とは隔つてゐない、お髪の毛に白いものがまじつてゐるのが拝される近さであつた、外人記者の謁見記には『すこし神経質な、しかし聡明な大学教授タイプ』と形容されてゐたが、もし私にも言葉がゆるされるならば、白いカラーに渋いネクタイ、そして茶の背廣に同じ色の靴をめされた陛下は『おだやかな學者』か、あるひは『やさしい紳士』と映つた、同僚のなかに廿五年間も宮内記者團に籍をおく宮廷記者の古強ものがゐたが、侍従からその由を申しあげると、陛下はにこりとされ『ずゐぶん長くゐるんだねえ』と微笑まれた、そして一同にむかつて『食糧事情が窮屈ださうだがみんなはどうしてゐるか』と改まつておたづねになつた、私たちが『非常に困つてをりますが、いろいろと工夫して凌いでゐます』と申しあげると『あゝさう』とうなづかれた、陛下はさらに『家は焼けなかつたか』とたづねられたので、数名のものが戦災を蒙つた旨お答へした、陛下はかさねてふかくうなづいてをられる」

リードにあたる冒頭部分が終わると記事はいきなり、吹上御苑が「いまはみるかげもなき荒涼たる武蔵野の原野にすぎない」ことを伝え、驚きを述べているが、ここでは風景の連続性を断つことによって戦中からの不連続性と、被災した国民との連続性が形成されている。そして天皇から返されたお辞儀の丁寧さを長々と説明したあと、「おだやかな學者」か「やさしい紳士」のようだったと感想を語ることによって、かつての「大元帥」をいきなり「学者」「紳士」の身体に豹変させる。さらに、食糧事情と戦災の被害を心配する天皇の慈悲を口語体の天皇の会話を引用して紹介して、「拝謁」の感想を記者が独白する後半へと続くのである。

「お顔色にはこの間関西へ行幸になつた當時のやうなおやつれのほどはうかゞはれず、御血色もやゝ取戻されてゐた、お聲も八月十五日のあの録音放送のときとはちがふやう

に思はれた、十分間余の短い挨拶ではあつたが、やゝ高い調子の澄んだお聲をきゝ、女性的なやさしさのなかにどことなくそなはつた気品に接してあるとこの人がいま『天皇』といはれ世界輿論の批判の嵐の中に立たれてゐる人物とはどうしても考へられない。あまたの臣下にとりまかれた帝王といふものが傲慢であり、尊大でありわがまゝであるといふことは、普通一般の想像であるが、陛下にはそのやうなかげはみぢんもない。むしろ人を疑はないすなほな御性格が一見してうかゞはれる『弱さ』さへ感ぜられるほどである」(下線は引用者、以下同様)³³⁾

記者は、この後半部分の記事のなかで、天皇を「やゝ高い調子の澄んだ声」や「人を疑わないすなおな性格」などという女性性を連想させる形容だけでなく、わざわざ「女性的なやさしさ」と直接的に「女性性」を強調し、括弧つきの「弱さ」という言葉を用いてさらに強調することによって、軍国主義的な「強い」男性性を天皇の身体から切り離そうとしている。記者は、「傲慢であり、尊大でありわがまゝである」と一般に想像されるとする「帝王」のイメージを払拭させるために、天皇本人の声など身体そのものを女性化して言説化する。さらにそれらの「女性性」は、彼といっしょに視覚化された娘たちと皇后の女性イメージによって、読者には想像が容易になる。しかしながら、天皇は完全に「女性化」されているわけではなく、実在の女性のみを家族に取り囲まれることによって、やさしい男性性、すなわち「人間化」を表象し、それまでの「厳父」や「元帥」のイメージを払拭することにある程度成功した。そして天皇の「女性性」や「弱さ」を強調した記事は、天皇の記者への「挨拶」を三千年の歴史の「解決」として提示し、これまで国民との触れ合いが出来なかったことを自分たちの責任として懺悔する論理へと導いて終わるのである。

「三千年のながい歴史の神秘はここに解決された、しかも国民として堪へがたい敗戦のかなしい日にそれが解決された、私たち国民がもつとはやくこのやうにして陛下にお會ひできたのであつたら、そして陛下御自身ももつと『言論の自由』をもつてをられたら、私たちはこのやうな不幸を未然に防ぎ得たのではなからうか」

このように、新しい「人間・天皇」を強く国民に印象付けるために掲載された写真と記事は、ジェンダーや公私の領域を何重にも錯綜して横断している。「天皇は人間である」と述べた詔書は「人間的な天皇」を強調することへとすりかえられたのである³⁴⁾。

33) 「天皇陛下に新聞記者團挨拶——帽子を脱いで御答禮」『朝日新聞』(東京)1946年1月1日、第2面。

34) 天皇の「女性性」や「甲高い声」のイメージは、中野重治の「五勺の酒」にも登場し、女性化した天皇像を通して天皇を受容する様子がわかる。だが、この「甲高い声」は、戦後の全国巡幸が終わっ

では、天皇と娘のツーショットの横に掲載されたもう一枚の写真は、どのように読み解けるだろうか？

この写真では、膝に鶏を抱いた皇后と孝宮が地面にしゃがみ、順宮と清宮は皇后に寄り添うように立っている。**【図版9】** スーツ姿の皇后・孝宮・順宮とワンピース姿の清宮たち4人が三角形の安定した構図を形成し、彼女たちの手前には太陽の光を浴びた健康そうな約10羽の白い鶏が皇后たちを慕うかのように集まっている。

皇居内で数羽の鶏を世話する皇后と娘たちには、敗戦後の食糧不足と混乱のなかにもながらも「食」と「育」に勤しむ女の役割が象徴化されていると言えよう。『朝日新聞』ではこの写真のすぐ左横に「供米や、好轉す」という見出しが並べられているが、食糧事情に明るい兆しが見え始めたことを伝える記事との並置によって、意図的であったかはわからないが、皇后たちの写真のメッセージはより効果的に送られた。写真は記事中の「やうやく日本再建の第一歩が自分たちの手中にあることが自覚され始め、これに官民指導層の意欲が加はれば将来は必ずしも暗黒ではないことがほの見える常態になつてきた」という一文と相乗効果をもたらしたと考えられる。

皇后と娘たちを写したこの写真が女の役割を象徴化しているということは、他の新聞と比較してみると一層明らかになる。たとえば、同じ元旦の『毎日新聞』では、第1面のトップに天皇の家族を写した二枚の写真と記事「仰ぐわれらの陛下 民に対し責任御痛感——本社記者拝謁記」が掲載されている。一枚は、先述した天皇と孝宮のツーショットと同じ写真であるが、もう一枚は、鶏の世話をする皇后たちの写真に代わって、皇后と娘三人が裁縫に勤しむ姿が載せられている³⁵⁾ **【図版10】**。記事では引揚同胞に対して、皇后が蒲団や毛布とともに「下賜」するお手製のチャンチャンコを縫っている様子であると説明されている。皇后の手元には眩いばかりの光が当たり、娘たちの裁縫と差異化することによって、皇后の慈悲を強調するよう演出されている。鶏に給餌する写真と同様、皇后の「御慈悲」「癒し」と女の役割を、裁縫を通じて象徴化したものと言えよう。

『朝日新聞』の写真に付けられた記事では、先に引用した拝謁報告記に続いて、「お手製のチャンチャンコ下賜——皇后様の御仁慈」という見出しのもとに、天皇・皇后の住居や質素な食事について述べ、御製——「海の外の陸に小島にのこる民の上安かれとたゝいのるなり」

た1954年夏、北海道での天皇と記者との会見記事のなかでは、「お声はあの当時のカン高いものとは変わり、低く太いバス」であったと描写され、声の男性化とともに国家の再建が果たされたことが伝えられた。（「天皇のお眼に映った北海道（記者会見記）」『読売新聞』1954年8月23日夕刊、第3面。）

35) 「仰ぐわれらの陛下 民に対し責任御痛感——本社記者拝謁記」『毎日新聞』1946年1月1日。『毎日新聞』では、第1面のトップに天皇たちの写真と記事を置き、マッカーサーの声明はその横に並べられている。また、天皇の詔書は紙面中央を占め、天皇一家の写真の重要性は非常に高くなっている。

——を紹介している。海外に残る日本人を心配する天皇を強調したのち、皇后が引揚同胞に宮内庁防空用の布団百枚と毛布百枚を下賜したこと、さらに手許の真綿を用いてチャンチャンコを縫い530枚を下賜したことなどを報じるなど、皇后の慈悲をクローズアップした叙述へと移る。

これが皇后の仁慈を示す写真であるならば、同じ空間に天皇は存在することができない理由も明白となる。女の模範として皇后が統率する家庭の場に、男性である天皇や息子たちが存在するわけにはいかないからである。天皇や皇太子たちが、皇后とともに裁縫にいそしんだり、食の領域に踏み込むわけにはいかないのである。そのためにもこれらの二枚の写真は、一枚ずつ別々に区切られる必要があった。家事に象徴化された女性領域をさらに別の空間として区切ることによって、かろうじて、天皇は完全な女性化を免れている。しかも、次々と戦犯たちの戦争責任が追及され、皇室財産凍結などの措置がなされるなど、天皇の立場がまだ不安定なこの時期にあって、「女は家庭内を守り、男は外で仕事」という性別役割分担を視覚化することもできないのである。同時にそれは女性の側からすれば、女は「家庭へ帰れ」とばかりにわざわざ母娘のみが一枚の写真に囲い込まれている表象であるといえよう。

皇居内での天皇の「散歩」は、内と外の境界上に位置する行為である。この「家庭」という女性化された私領域における天皇像の矛盾は、のちに、団欒だけをメッセージとして送る元旦の「ご一家写真」像と、二日の一般参賀における「公」の天皇像が形成されることによって解決された。公的に創出されたプライベートな一家団欒と、一般参賀で皇族を率いて国民に姿を見せる天皇のパブリックなイメージは、内と外の境界を明確に分けることを可能にしたからである。

1946年元旦の写真では、天皇のジェンダーは、男性化と女性化が同じ紙面のなかで錯綜して行なわれ、三重に複雑化していると言える。第一に「人間化」を天皇の「女性性」の描写によって表わし、第二に娘との並置によって「男性性」を復権させ、第三に家庭を女性の私的領域として囲い込み天皇と切り離すことによって、天皇自体は完全な女性化を免れるという構造である。天皇の「人間化」とは、背広の着用だけでなく、まず最初に、天皇とともにいる女性家族のイメージと、次に、その後天皇が巡幸した際に発表される「群集」としての国民イメージを巧みに使い分けながら表象された。

② 山端親子と天皇一家の写真

1946年元旦に新聞で発表された写真撮影を誰が計画し実行したかはよくわからないが、当時の侍従らの日記には、断片的に写真に関する記述が残されている。たとえば、次長・木下道雄の日記には1945年12月15日、木下は朝から天皇に会い、写真を撮る許可を得たことが書かれている。

「これより先、9時30分、御文庫にて拝謁。

一、山端祥玉をして御日常の御生活の御写真を拝写せしむる事、御許しを得たり。23日、東宮御誕辰日に来る事。」³⁶⁾

12月23日の皇太子誕生日に、山端^{しょうぎょく}祥玉というカメラマンに日常生活の写真を撮らせる許可を天皇から得たというのであるから、おそらく木下も写真撮影の段取りや計画に直接関与していたのであろう。同じ日の午後、木下は天皇裕仁に会い、「御製を宣伝的にならぬ方法にて世上に洩らすこと、御許しを得た」と述べている。これは天皇の戦争責任を逃れるために木下が「情報操作」のために周到に準備した「御製」の発表に関する記述であるが、写真や短歌を巧みに利用して天皇のイメージを作り変えようとした側近たちの動きがわかるだろう。

また、入江相政の日記にも、1945年12月21日に「十時から二十三日に御写真を拝写させるのでその準備として山端氏等三人を案内して三井さんと二人で花蔭亭、御文庫へ行く」³⁷⁾という記述がある。つまり、12月15日に日常生活の写真を撮る許可を得たあと、21日山端祥玉らの下見・準備、22日日本人記者団「拝謁」、23日写真撮影、というスケジュールで元旦新聞の記事と写真が作られたことになるわけである。

木下が名前を挙げている山端祥玉（本名：啓之助）は、当時有名な写真家だった³⁸⁾。

彼は、1927年、写真と印刷に関連した仕事の一切を行なう写真事業会社ジー・チャー・サン商会（Graphic Times Sun）を設立し、高速度輪転写真焼付機で特許を取るなど写真業界では先駆的な仕事を手がけていた。1933年から34年にかけて、G.T.サン社は、三菱製紙に働きかけて国産バライタ紙の製造を完成させ、また「大引き伸ばしの元祖」としても知られた。ニューヨーク・サンフランシスコ万国博覧会（1939～40年）では、日本館で展示された数

36) 前掲『側近日誌』p.78.

37) 入江為年監修・朝日新聞社編『入江相政日記』朝日新聞社、1990年、p.23:日記にある「山端氏三人」について、注解では山端祥玉の名前が挙げられているが、その他の二人が誰を指すのかは不明である。「三井さん」とは、おそらく侍従の三井安弥^{やすき}（1905-1986）を指すと思われる。三井は内務省をへて昭和10年宮内省入りし、のち管理部長になった。

38) 山端祥玉の写真家としての初期の経歴については、1927年海軍省に提出した経歴書が防衛庁防衛研究所に存在する（「写真経歴書の件」公文備考演習4巻70：レファレンスコードC04015785400）。山端祥玉・庸介については、『日本の写真家23：山端庸介』（長野重一他編、岩波書店、1998年）にある石井亜矢子の解説と「略年譜」が詳しい。その他、次を参照した。NHK取材班『NHKスペシャル 長崎 よみがえる原爆写真』日本放送出版協会、1995年；林華子「山端庸介の長崎原爆の記録写真——撮影の経緯と収集作品の撮影地点」『川崎市市民ミュージアム紀要』第10集、1997年；『日本の写真家23：山端庸介』岩波書店、1998年；飯沢耕太郎『写真とことば——写真家二十五人、かく語りき』集英社新書、2003年。

十メートルの大写真壁画「躍進の日本」を制作し、山端祥玉は出品写真監督として渡米している。当時、「これ程までの大きさに写真を引き伸ばすのは日本初の試み」³⁹⁾であったといわれ、写真壁画の撮影は、主として土門拳が担当した。1943年、ジーチャーサン商会は「山端写真科学研究所」に名称を変更し、それまで撮影していた日本の国勢・文化・風土に関する写真原板を整理分類し、「大東亜写真文庫」として活用する体制を整え、一層の拡充整備をはかった。同年3月、さっそく山端写真科学研究所は、100畳敷写真大壁画「撃ちてしまむ」の製作を担当し、撮影・引き伸ばしに携わっている【図版11】⁴⁰⁾。この大壁画「撃ちてしまむ」は、大本営陸軍指導部・指導、朝日新聞社・企画、金森重嶺・撮影指導、山脇巖・監督による戦意高揚のための大プロジェクトであり、引き伸ばされた写真は東京日劇と大阪高島屋の正面に展示された。

敗戦直後8月31日、山端写真科学研究所はいったん解散したが、1945年10月、毎日新聞社からの出資と役員参加などの協力を得て、毎日新聞社とG.T.サン社との合弁会社「サンニュースフォトス」を設立し、山端祥玉が株主および取締役となった。「サンニュースフォトス」は、アメリカのACMEニュース社と連携して、日本の報道機関に海外のニュースを配信する業務を行っており、あのマッカーサーと天皇との会見写真の公表や流通にも何らかのかかわりがあったと考えられる。その後、1946年4月には、毎日新聞社の全面協力により、「サン写真新聞社」を設立し、息子の庸介が取締役に就任（のち、祥玉は会社を毎日新聞社に譲渡）。同社よりタブロイド版日刊新聞『サン写真新聞』を創刊した（1960年3月廃刊）。1946年末には会社を再興し、株式会社ジーチャーサンとして再出発した。翌1947年12月、庸介はジーチャーサン社長に就任し、名取洋之助の責任編集で『週刊サンニュース』をサンニュースフォトスから発行し（47年11月）、その企画に彼も携わった。

山端祥玉は、天皇一家と因縁が深い写真家である。彼は、1927年のG.T.サン社の設立以前に、シンガポールで写真業を営んでいた。1921年、ヨーロッパ訪問途中にシンガポールに寄港した皇太子裕仁を、時事新報社特派員として撮影したことがある。そして、東京本社設立当初から海軍省・陸軍省関係の仕事を請け負い、G.T.サン社が1935年陸海軍の指定会社となったことから、陸海軍だけでなく皇室関係の撮影をするようになった。1937年、山端祥玉は奏任待遇（大佐と同位の名誉階位）を与えられ、軍報道局任命の撮影チームの主任になる。1939年から40年にかけてのニューヨーク・サンフランシスコ万博のための渡米に際しては、「内閣情報部、海軍省、陸軍省等の公命として北米及び欧州諸国の視察も含まれていた」⁴¹⁾

39) 同前、林華子、p.53.

40) 「撃ちてしまむ」の巨大壁画写真の制作については、山端庸介「百畳敷大壁写真 撃ちてしまむの制作苦心談を訊く」『寫真文化』26巻第4号、1943年4月、pp.9-12.

41) 同前、林華子、p.54.

というから、彼は海外の写真メディア業界の情報に通じていたに違いない。このような戦中の山端祥玉と皇室とのつながりから、1945年末の天皇一家の撮影が任されたのだと推測される。つまり「人間天皇」の写真は、戦争遂行のための国家的プロジェクトを担ってきた最先端の技術を持つ山端たちによって撮られたのである。

祥玉の長男、山端庸介（本名：啓式、1917-1966年）は、今日では彼の撮影した長崎原爆写真によって有名であるが、大学生の頃から父の経営するG.T.サン社の仕事を手伝っていた⁴²⁾。G.T.サン社が陸海軍の指定を受けていたこともあり、庸介は1940年、海軍省の写真班員として中国に赴任、以後太平洋戦争に従軍し、インドシナやアジア各地の作戦に参加・撮影した【図版12】。1942年に国内任務に戻り、1945年7月、九州における本土決戦準備のため西部軍報道部に徴用されたことから、1945年8月10日原爆直後の長崎を撮影することになったのである。このとき庸介は、約12時間をかけて被害状況100カット余りを撮影した。そして敗戦後、庸介は経営者に転身してサンニュースフォトス取締役となり、1945年暮れの天皇一家の撮影企画に携わるようになった。

息子の山端庸介も、天皇と皇室に特別な因縁をもっている。西部軍報道部に派遣された彼は、8月9日の原爆投下で被害を受けた長崎を、東潤と山田栄二との3人で視察するよう命令を受けた。東潤（1903-1977年）は西部軍報道部・嘱託の詩人、山田栄二（1912-1985年）は兵隊として配属されていた洋画家だった。3人は、山端が写真記録、東潤が連絡・調査・民情視察、山田が「画笔によって生々しい現実を描くこと」の任務を分担し、彼らはようやく長崎にたどりついた。撮影にあたり庸介は、軍からの命令「出来るだけ対敵宣伝に役立つ、悲惨な状況を撮影する」ことと、個人的には「如何にして生命を全うできるかの解決の鍵を発見する」ことを念頭に置いていたと回想している。だがそれは、「むしろひたすらこの地獄としか思えぬ極限状況を記録し続けたというほうが正確だろうし、かくしてカメラに記録された現実撮影者の主体を越えて生・死・文明・戦争といった普遍的な高みにまで達するリアリティを持つことになった」⁴³⁾と、のちに評される状況だったと考えられる。そして長崎で山端は、のちに彼の代表作のひとつとなる「おにぎりを持つ少年」や、赤ん坊に乳房をふくませる母親の姿や黒こげの死体の写真などを撮った【図版13-14】。戦後、GHQによる原爆報道規制が解除された1952年、彼が撮った長崎の写真は、『ライフ』の広島・長崎原爆特集号（9月29日号）や日本での記録写真集の出版によって、広く知られるところとなった。

42) 山端庸介は、1917年8月6日シンガポールで生れた。当時、父祥玉は、シンガポールで写真材料商サン商会と、写真館を兼営したサン株式会社を経営していた。1925年、日本に帰国、法政大学在学中に父の撮影の仕事を手伝うようになった。祥玉は、帰国の翌年1926年にG.T.サン株式会社を東京で設立。

43) 日本写真家協会編『日本写真史1840-1945』平凡社、1971年、p.444.

庸介が長崎で撮った写真と天皇との「遭遇」は、1956年に起こった。『経済白書』が「もはや戦後ではない」と宣言した同年3月、東京で「ザ・ファミリー・オブ・マン われらみな人間家族」という写真展が開かれたときのことである⁴⁴⁾。この写真展は、当時ニューヨーク近代美術館写真部門のディレクターだったエドワード・スタイケンが同館開設25年を記念して企画し、世界68カ国、503枚の写真を集めてアメリカ、ヨーロッパで巡回した大掛かりな展覧会である。その後開催された日本展では、山端庸介が社長を務めるG.T.サン社がすべての展示写真の引き伸ばしを担当した。展覧会には1日1万人以上の観客が押しかけ、全国巡回で100万人を越える空前の入場者動員を果たす。アメリカ展には山端の《おにぎりを持つ少年》が出品されていたが、日本展では、大きく引き伸ばされた黒こげの死体の写真の上にかろうじて生き残った子どもや人々の写真を貼ったパネルが展示されていた。だが、昭和天皇が写真展を訪れたとき、その山端の写真はカーテンで覆われ、天皇の目にふれることはなかった。その後、山端の作品に対する検閲は写真そのものが撤去されるという事態に発展し、大きな問題となった。天皇の目から隠さなければならなかった長崎の写真は、かつて軍の命令によって山端が撮影したものだ。『人間天皇』を演出するために天皇一家の写真を撮った彼は、人間家族を讃歌する「われらみな人間家族」展にもう一つの家族、長崎被爆者の写真を出品し、その写真はついに公的に天皇からまなざされることはなかったのである。その後、山端庸介は、放射能の二次被害と疑われる十二指腸乳頭部ガンによって、1966年、49歳で亡くなった。

③ 日米合作「人間天皇」の写真と表象

「人間天皇」の写真に掲載したアメリカの『ライフ』誌の記事によれば、山端祥玉・庸介親子は、同誌からの依頼で、人間天皇となった裕仁と一家の写真を、1945年12月の日曜日、四回にわたって撮影したという。宮内省はライフ社に特別に許可し、それらの写真は1946年元旦の日本の新聞や、『ライフ』（1946年2月4日号）、『アサヒグラフ』（1946年3月25日号）に掲載されることとなった。『ライフ』は、「ヒロヒト邸の日曜日——天皇、初めての非公式の写真にポーズす」の見出しで、200枚近く撮られたという写真の一部を発表している【図版15】⁴⁵⁾。見出しの上に大きく掲載された写真は、皇居内の庭を散歩する天皇と家族たちの様

44) Carl Sandburg (Prologue), *The Family of Man*, (exh. cat.), Museum of Modern Art, New York, 1955. カタログには、「ザ・ファミリー・オブ・マン——われらみな人間家族」の日本語解説書が別冊として付けられている。山端庸介の《おにぎりを持つ少年》は、p.178に掲載。日本展は、高島屋・東京日本橋で1956年3月から4月まで開催された。3月の山端庸介の写真撤去に対して、4月、伊藤逸平、渡辺勉、田中雅夫、名取洋之助らは連名で抗議声明を発表し論議を呼んだ。

45) "Sunday at Hirohito's: Emperor poses for first informal pictures," *Life*, 4, Feb. 1946, pp.75-79.

子である。「皇太子が姉妹と両親を率いる、昔も今も花蔭亭はヒロヒトがしばしば瞑想に耽った場所である」と、キャプションが述べているように、皇太子を先頭にして順宮、孝宮、天皇、清宮、皇后が、一列に並んで池の飛び石を渡っている写真である。胸をはり大きな歩みを進める皇太子に比べて、杖をついた天皇の足取りは弱々しくも見え、軍隊を統率していた大元帥のイメージとは程遠い。『ライフ』は5ページの特集のなかに、10枚の写真を入れ、次のように記事を始めた。

「本紙掲載の写真は、日本の皇室のこれまで公表された初めての非公式写真である。天皇の顔の微笑を見せるのも初めてであり、鶏といっしょにいる皇后も初めてであり、食事中の皇室の初めてであり、アメリカのマンガを読む天皇も初めてである。

日本にとってこれらの写真は、天皇の神性放棄よりもはるかに人々を驚かせ、粉々に打ち砕くものだった。写真のうちの二枚は東京の新聞で先月公表され、センセーションを引き起こした。日本の宮内省は、『ライフ』に対し「特例」として、12月の四回の日曜日を使って皇室のメンバーを写真に撮ることに許可を与えた。一家は暗殺を恐れているので、アメリカ人の写真家は禁じられ、サンニュース・エージェンシーの日本人の写真家たちが使用された。」⁴⁶⁾

『ライフ』によれば、12月の毎日曜日、4人の日本人写真家によって撮影されたという。誌面では、『スターズ・アンド・ストライプス』の連載漫画を皇太子に読み聞かせる天皇や、昼食風景、居間や庭での団欒、天皇の植木の水遣り、天皇の採集した海老、生物学研究室の写真に続いて、最後に書斎で『タイムズ』と『スターズ・アンド・ストライプス』を読む天皇が写し出された。ライフ社と宮内省、山端親子のつながりなどについては不明なことが多いが、山端親子と人間天皇の撮影の関わりは、一般に次のような経緯として知られている。「人間天皇の写真を撮りたいというライフ社の申し出が、GHQ民間情報教育部を通じて宮内省に届く。その撮影依頼が、かねてから天皇の御身上を写真で世間に紹介する必要性を宮内省に進言していた父のもとにきて、父らとともに、皇居で天皇一家を撮影（12月）。」⁴⁷⁾

しかし、1946年元旦の「人間宣言」の前に、アメリカの一民間企業のライフ社が、「人間天皇の写真」を撮りたがっていたという話も、考えてみれば奇妙である。断定はできないが、おそらくその前に宮内省かGHQ、あるいは山端の働きかけがあったのであろう。木下道雄の『側近日誌』1946年1月19日には、「朝御文庫にて聖上御召。Lifeの質問に関する答、大略

46) Ibid., p. 75. (日本語訳は北原)

47) 前掲、「山端庸介 略年譜」『日本の写真家23：山端庸介』p.68.

完成す」という記載がある⁴⁸⁾。次頁に付けられた〔補注〕によれば、Lifeから宮内省に13項目の質問書が寄せられ、それへの回答を用意していたが、質問・回答とも公表されなかったことが書かれている⁴⁹⁾。ライフからの質問は、「日本民主化に関する陛下の御方策如何」と、民主主義に関する問いから始まり、皇太子の教育、連合軍の日本占領の期間、国民の民主主義教育、国家神道、キリスト教への改心の可能性、天皇の米英訪問の意向、日米戦争の原因、退位の可能性を問う項目が続き、最後にライフ読者へのメッセージで締めくくられている。メッセージは「互いに信じ合いましょう。そうして平和な生活を送りましょう」である。そして翌月2月4日号の『ライフ』に、天皇一家の写真が掲載され、新しい天皇像がアメリカ国民に対してアピールされたのだった。

山端は、1946年にも天皇・皇后を皇居で撮影している。山端親子の撮影したこれらの写真は、日本では『天皇 Emperor』という写真集として、1947年2月11日、紀元節の日に発行された【図版16】。編著者及び、写真製作は、山端祥玉が毎日新聞社と設立した「サンニョースフォトス」である。息子庸介は、1947年から同社の社長に就任している⁵⁰⁾。翌1948年4月29日の天皇誕生日には、毎日新聞社、共同通信社、宮内府の撮影した写真を加え、ページ数を初版95頁から107頁に、定価100円から180円に値上げした改定版を出版している。ともに表紙カバーは、顕微鏡をのぞく背広姿の天皇の姿である。では、写真集『天皇 Emperor』のなかで、「人間天皇」として打ち出された新しい天皇のイメージはどのようなものだったのだろうか。詳しく検討してみたい。

まず、表紙カバー（裏見返し）には、「トツパンの歴史的出版」と題して、次のような説明がつけられている。

「トツパンの歴史的出版

昭和21年初頭に發せられた陛下の神格否定人間宣言は、日本史上劃期的なものであるが、この「天皇」寫眞集は、人間宣言を寫眞を以てしたものであり、高松宮宣仁親王・東久邇宮成子内親王（照宮）両殿下の御執筆と共に、正に歴史的出版といふべきであらう。

これを處女出版としてスタートするトツパンは、出版文化印刷文化の面より、新日本建設に大きな希望と熱情を持つてゐる。大方の御期待を願ふと共に、讀書人各位の御支援を切望する次第である。」

48) 前掲、木下道雄『側近日誌』p.119.

49) 〔補注〕「LIFE」の質問書と回答」、同前、pp.120-121.

50) 1949年、山端祥玉がサンニョースフォトスの代表権を松岡謙一郎に譲ったため、山端親子は同社から手を引いた。

つまり「人間宣言」を写真で表わしたのが、『天皇 Emperor』だというわけである。一方、表紙の表見返し部分には、この「ライフ」の特ダネに対して、「ライフ」編集長から「サンニュースフォツス」社長（＝山端祥玉か庸介）に讃辞と感謝の電報が送られたことが紹介されている。

「『ライフ』の特ダネ

1946年2月4日の米誌「ライフ」は、Sunday at Hirohito's（ヒロヒト邸の日曜日）Emperor poses for first informal pictures（天皇初めて非公式の寫眞にポーズす）と題して、この寫眞集中の数枚を發表し、當時世界のゴウゴウたる天皇制論議の渦中に重大な示唆を與へた。陛下のお寫眞といへば正面切つた軍装ばかりで、軍國主義のシンボルのやうな感じを世界に與へてゐた際、この寫眞は「ライフ」のヒットになつたので、提供者の「サンニュースフォツス」社長に対し、「ライフ」編集長から鄭重な讃辞と感謝の電報が寄せられた。」

『天皇 Emperor』（1947年版）には、77枚の写真のほか、高松宮宣仁親王から始まる天皇讃歌が綴られている⁵¹⁾。当時UP東洋総支配人の肩書きを持つマイルズ・ヴォーンは、文中で、天皇を極端なミリタリストやナショナリストを一貫して制肘してきた平和の提唱者であると讃えており、彼の文章だけは日本語訳・英語の両方が掲載されている。写真にはすべて日本語・英語のキャプションがつけられていることから、日本人だけでなく、おそらくアメリカ人や英語の読める読者を期待して出版されたと考えられる。

写真は、まず、『ライフ』にも掲載されていた、ソファに腰掛け『タイムズ』を読む天皇の姿から始まる【図版17】。卓上には米軍の機関紙『スターズ・アンド・ストライプス』が置かれ、天皇の背後の本棚横には、リンカーンとダーウィンの像が上下に並べられている。「自由と進化の両偉人に、陛下の日常の御関心と御人格の一端をうかがふことができる」⁵²⁾（キャプション）というわけである。彼の視線は新聞に注がれたままであり、御真影と異なりこちらに向けられていない。そのため、読者は、まるで天皇のプライベートな部屋を覗き見しているかのように、これまで知られてこなかった「奥」を見ることができるのである。冒頭で

51) 目次は次の通りである。高松宮宣仁親王「逸話のない陛下」／東久邇宮成子内親王「父陛下」／金森徳次郎「憲法と天皇」／Miles W. Vaughn, "My Impressions of the Emperor of Japan", マイルズ・ヴォーン「天皇の印象」／武者小路実篤「純情の人・天皇」／サンニュース フォツス「写真」／賀川豊彦「平民「ヒロヒト」」／石渡莊太郎「御親子の情」／服部廣太郎「生物学者としての陛下」／藤樫準二「人民の中を行く陛下」／秋山徳蔵「陛下の御食膳」

52) サンニュースフォツス編『天皇 Emperor』トッパン、1947年、p.14.

このようにアメリカとの協調と一体を書斎の天皇が示したあと、生物学を研究する天皇の姿に移る。彼は忙しく文献を調べ、一心に顕微鏡を覗いている様子である。①書斎・生物学研究室の天皇と文具・標本など（10枚）が冒頭に示されたあと、②天皇が皇后や子どもたちとくつろぐ様子や、子どもたちの日常風景（36枚）が続き、空襲で灰燼に帰した宮城焼跡（1枚）をはさんで、③全国巡幸（27枚）、④新憲法公布を祝う人々と天皇・皇后（3枚）で終わる。③から④にかけて、天皇が群衆に埋まり識別のつかない写真が登場するのは、のちに検討する新聞での表象と同じパターンである【図版18-22】。全写真のほぼ半数が家族との「日常風景」に割かれていることから、いかに天皇の「家庭」や「団欒」のイメージを重視したかが分かるだろう。

これらの写真には、元旦、日本の新聞に登場した天皇・孝宮のツーショットや、皇后と娘たちの鶏の世話、裁縫シーンなどが含まれているほか、皇太子の元気な姿も強調されている。「親類の写真でも見るような親しみ」「美しき家族」といふ小説のやうな御一家「日本のどこの家庭でもふだん見られるこの情景」「御食事は民間で想像してゐるよりも、遙かに質素」「おだやかな御動作といひ、何となく英国風紳士を思はせる御風采」⁵³⁾などと、家族といる天皇を形容する一方で、「陛下のお言葉は、女性的と批評されるほどやさしく、ていねいである」と述べ、1946年の元旦新聞と同様、女性性を強調していることも注目される。

『天皇 Emperor』に文章を寄せている毎日新聞社の藤樫準二は、1920年から宮内省内の記者クラブに属し、皇室ジャーナリストとして記事を書き続けてきた記者である。1945年12月22日に吹上御苑で行なわれた初の天皇「記者会見」も、藤樫らが強く要望したためだと言われている⁵⁴⁾。前に紹介した『朝日新聞』（1946年1月1日）の記事のなかで、「廿五年も宮内記者團に籍をおく宮廷記者の古強もの」の同僚とは、おそらく藤樫のことであろう。彼は、新憲法公布の2ヵ月前、1946年9月に一般向けに皇室の本を出版した。『陛下の“人間”宣言』である。高橋紘によれば、この本は、元宮内大臣・石渡壮太郎の秘書官、鹿喰清一が金策をして書かせたという。その後も、小野昇の『人間天皇』（1947年）や、占領期の天皇の視覚表象の総集編とでもいふべき豪華な写真集『天皇』などの同様の本の出版が続くが、『陛下の“人間”宣言』はそのさきがけとなった⁵⁵⁾。『陛下の“人間”宣言』の内容は「人間天皇」の「素顔」を通して、戦前から天皇が平和主義者であったことをベテラン記者の筆致でたた

53) キャプションの「英国風紳士を思はせる御風采」は、宮城で植木の世話をする天皇の写真につけられたものであるが、英文では、“His even temper and gracious manners are apparent in these pictures.”となり、「英国風」は訳されていない。このように、英文と微妙に異なる部分がある。同前、p.44.

54) 高橋紘「人間天皇演出者の系譜」『法学セミナー』増刊総合特集シリーズ、1986年5月号、p.146.

55) 小野昇『人間天皇』一洋社、1947年；日本輿論調査研究所『天皇』天皇アルバム刊行会、1952年。後者は、315頁からなる大型の豪華な写真集である。

えたものであり、そのなかに、元旦新聞の写真について言及した箇所がある。

「伝統的な宮中の不文律に、自己の便宜のために、官僚や軍閥が便乗して、陛下を神様として人外に疎隔した。そして陛下のすべての人間性を國民に秘しかくしし、殊に愛情濃やかな寫眞などを國民の前に示さるべきでないとして全く偶像扱ひにしてみたが、終戦後、陛下ご自身もこの不合理な封建と傳統の塔から脱せられ、皇后様、皇子方と一家お揃ひでご散歩になつた時の寫眞や、陛下の肩に皇太子様が寄りかゝつて外字新聞をご覧の寫眞、皇后様が内親王方と鶏舎の前で餌をお與へになつてゐる寫眞など、思ひがけない陛下中心の和やかな寫眞が、次々と新聞に掲載されて急に陛下と國民の新しい親愛が醸し出されて来た。

今までこのやうな家庭的な寫眞に、ついぞ接したことのない國民は、その意外さを感じ『われわれの家庭とおなじだね』と、今更ながら囁きあひ、人間味の溢れた皇室のご家庭を拝し、明るくも親しみ深い印象を受けたのである。』⁵⁶⁾

このように藤樫は、1946年の元旦新聞やその後発表された皇室写真を、いかに読むべきか、いかに読むことを人々が期待されていたか、丁寧に解説しており、横暴な官僚や軍閥との対比として、天皇の「家庭」がどのように効果的に視覚化、言説化されたのかがよくわかる。また、「“人間天皇”の横顔＝挿話と逸話」の章では、天皇が国家的な重大事件に際して心痛し、食欲減退や不眠症になり侍医たちが苦心したエピソードを紹介し、「陛下のこの弱さうに見えるご資性こそは日本民族が木ツ端微塵に粉碎される土壇場を見事に旋回せしめ、これを平和への新生に導いた偉大な力であつたのである。…日本の破局を救つたのは実に陛下のこの柔軟性だつたのだ」⁵⁷⁾と述べ、ここでも天皇の「弱さ」を創り上げ、あたかもそれが天皇の本来の姿であったかのように物語化していく。1946年元旦、『朝日新聞』の記者が記した天皇の「弱さ」や「女性性」の表象は、決して、一記者の思いつきや妄想ではなく、政策的に打ち出されていたことがうかがえるのである。

④ 「国民とともに」いる天皇像から、「ご一家」像の（再）構築へ

正月に天皇が皇后や娘たちと登場した写真が発表されてからのち、彼の新聞写真での表象はどのように変化したのだろうか？ 2月11日の紀元節では、米進駐軍の新聞『スターズ・アンド・ストライプス』を読む天皇と皇太子との戦後初めてのツーショット写真が公開され、

56) 藤樫準二「曾ては皇后様の丸髷姿——萬事世間なみのご家庭生活」『陛下の“人間”宣言——旋風裡の天皇を描く』1946年9月、pp.60-61.

57) 同前、p.32.

正月写真で隠されていた皇位継承者の健在ぶりと血の継承の揺るぎなさを示した。この写真は、山端親子らが撮影し、写真集『天皇 Emperor』にも収録された一枚である。1946年の正月以降『朝日新聞』では、天皇がツーショットで並んだ写真は、散歩する孝宮と天皇（元旦に掲載）、英字新聞を読む皇太子と天皇（紀元節）、戦後初の総選挙の投票速報をラジオで聞く皇后と天皇（4月11日）の三枚である。それらはすべてスナップショット風の写真であり、天皇の優位性を示したものとなっている。

その後、よく知られるように各地を訪れた天皇が人々と接する巡幸写真が次々と掲載された。そして興味深いことに、あたかも「国民」とともに存在することを象徴するかのように、『朝日新聞』における天皇の姿は、急速に群集の中に埋もれていくのである。新憲法公布を直前にした10月23日紙面には、18年ぶりに名古屋を訪れた愛知県巡幸二日目の写真を載せているが、名古屋市役所前の「人波にもまれて動けぬ陛下」の様子は、まるでデモか集会のなかにいるかのようなイメージである【図版23】。さらに11月3日の新憲法公布にあたって第1面を飾った大きな写真は、宮城前広場に集まった群集の中に埋まった天皇の姿を円形で囲むことによって示しているが、もはやどれが天皇か、識別は不可能である【図版24】。そして、国民の中に埋もれてしまったまさにこの日を期して、天皇・皇后像が再生し、戦後初めて国民の前に〈お揃いで〉登場する公的なイメージが発表された。11月3日の『毎日新聞』は、「平和日本の象徴」として、天皇と皇后の肖像写真を掲載し「終戦後初めて一般にお貸下になる」ことを報じた【図版6】⁵⁸⁾。天皇の全国巡幸が報じられたあと、天皇が群衆のなかに埋もれてしまい、日本国憲法公布の日にアップで登場するのは、その後の写真集『天皇 Emperor』でもくり返される共通のパターンであるが、あたかも民衆の力によって新たに生み出されたかのような印象を与える天皇像なのである。

戦後の天皇行幸の変遷を通してどのように象徴天皇制が形成されたかをたどった坂本孝治郎は、1946年11月3日が戦後の「象徴天皇制の典型的な儀礼様式の端緒を開くもの」であったと述べ、それを「旧天皇制下の「四大節」のひとつとして重要な儀礼日であった明治節に新憲法が公布された、その象徴的な継続と転換の名誉が修復された機」であったと分析して

58) 「平和日本の象徴——民主のお姿の両陛下」『毎日新聞』、1946年11月3日、第1面。宮城前大広場を天皇がソフト帽とモーニングを、皇后が宮中服を着用するという服装と相補うかのように、肖像写真では、天皇は軍服を髣髴とさせる詰襟の天皇服を着用し、皇后は洋装で、御真影と同じように両手を前で組むポーズを取っている。記事は「陛下のプロマイドが店頭に飾られるのも間近いであろう」と結んでいるが、「ご真影からプロマイドへ」という流れが実現するのは、のちに松下圭一が「大衆天皇制論」（『中央公論』1959年4月号）で分析したように、テレビの普及や女性週刊誌の発刊などによるメディア環境の変化を背景とした、皇太子結婚—ミッチーブームまで待たねばならなかった。

いる⁵⁹⁾。まさにその「継続と転換の名誉」の修復は、天皇と皇后の「ご真影」の再構築という形でも表現されたといえるだろう。11月3日、天皇は、新聞紙面における御真影と、貴族院の公布式典では天皇服姿で現われ、祝賀大会の都民で埋まった宮城前広場ではモーニング姿で登場するという二種のイメージを同時に表出させた。だが、新しい天皇服を纏った天皇は、「継続と転換の名誉」の瞬間を最後に公の舞台から姿を消すこととなった。半年後の1947年5月1日皇室令全廃とともに天皇服は廃止され、新憲法施行（1947年5月3日）にも、第一回国会の開会式（6月23日）に際しても、彼はもはやこの服を着用することはなかった。

「午前十一時二分松岡議長の御先導で陛下は左手とびらから式場にお出ましになり、正面の席につかれた。モーニングという議会行幸の前例にない御服装である。これまでのいかめしい、天皇服と違って国民結合の象徴の身近かさが感じられる。このとき松岡議長は進み出て、陛下に背を向け、議場に正対するという姿勢で、初国会の開会を宣する式辞をのべはじめた。この瞬間、これを額ぶちにはめればそのまゝ“新憲法序章”という一幅の絵と言い得ようが陛下にうしろを見せて立つその人は、一旋盤工あがりの松岡駒吉氏である——」（『朝日新聞』1947年6月24日1面）

国会開会式の勅語で「わたくし」の呼称を用いた天皇は、神宮や議会での天皇服姿と、国民の前での背広やモーニング姿という敗戦後から1年半揺らぎ続けてきたイメージの二重制に終焉を告げ、ようやく背広姿の身体へと統合されたのである。もはや、新天皇服の御真影はほとんどその役割を終えていたと言える。

天皇の写真は、1952年、独立を待ちわびるかのように、秋田県の私立高校の依頼によって下賜されたことがある。『朝日新聞』によれば、私立敬愛学園高等学校では、「生徒の平和教育のため、平和愛好者としての天皇陛下のお写真をいただきたい」と、1952年6月13日付けで文部省を通じ宮内庁に申し出を行い、7月17日、下付されたことが報じられている⁶⁰⁾。「同校では十八日の学期末卒業式で、お写真を全校職員、生徒千四百五十人に公表。陛下の御近況を伝えて校門わきの平和塔（元奉安所）に飾るという。」敬愛学園の依頼を宮内庁に取り次いだ日高文部次官は、「これからもそういう希望があれば取つぐ。しかし陛下のお写真の扱いは慎重にして、陛下が再び神格化されることのないようにしてほしい。だからお写真の前で敬礼するのは、日の丸の旗に敬意を表わすのと同じで当然だが、強制的にやらせることはよくない」と述べた。

この下付については、復古調であると批判されたためにお写真の下賜は中止にいったと

59) 前掲、坂本孝治郎『象徴天皇制へのパフォーマンス』p.133.

60) 「天皇陛下の「お写真」——終戦後初めて 秋田の学校へ下付」『朝日新聞』1952年7月18日、第3面。

言われている⁶¹⁾。だが、中止の理由は、批判だけにあったのではないだろう。一方で、正月に新しい「ご一家」写真の像と、一般参賀による皇室の現前性が儀礼として形成・定着されつつあったこの時期に、天皇皇后写真の「下賜」という装置はすでに役割を果たし終えていたからではないだろうか。敗戦直後あわただしく制定された天皇服を着た裕仁の像は、一定の機能を果たし、46年11月の新憲法公布のまさにその日に「御真影化」を宣言した瞬間に、公の舞台から姿を消したのであった。

第2節 「プライベートなご一家像」(元旦写真)と「パブリックな皇室像」(一般参賀)の構築

(1) 「天皇ご一家」像の構築へ

1945年から46年は、戦争で負けた天皇のイメージが性差の境界を激しく揺れ動く動揺の時期であった。また、戦争責任を免れると同時に国体を護持しなければならないという相矛盾した天皇のイメージは、家族と団欒し全国を巡幸する「人間天皇」の提示だけでは十分ではなかった。しかも新憲法公布とともに発表された新天皇服姿の天皇と皇后の御真影は、すでに機能を果たしえなくなっていた。なぜなら、45年末のGHQの国家と神道の分離命令によって文部省は学校儀式での「奉掲」禁止を指示せざるをえなくなり、もはや学校教育現場における「奉拝」という制度的基盤を失っていたからである。プロマイド化を目指した天皇服の御真影の像は、一方で同時展開する全国巡幸の天皇の姿と齟齬をきたしていた。天皇と側近たちは新たな表象システムの創造を迫られていたのである。

前節では、危機に瀕した天皇の身体表象の攪乱を検証したが、敗戦から独立にいたるまでの正月の新聞紙上に現われた天皇とその家族の視覚イメージを本節では概観してみることにしよう。まさにこの時期に、今日の元旦の「天皇ご一家」像に直接的につながるイメージが登場するのであるが、それは、どのように現われたのであろうか？この時期は新聞によって使用された写真や報道にかなりばらつきがあるので、ここでは『朝日新聞』と『毎日新聞』

61) 「御真影」の歴史については、前掲、佐藤「解説」：前掲、岩本努『「御真影」に殉じた教師たち』：籠谷次郎「わが国学校における『御真影』について——その下賜と普及の考察(上)(下)』『日本史研究』no.159、160、日本史研究会、1975年を参照。敬愛学園の御真影下付については、参議院の委員会で、須藤吾郎委員によって取り上げられ、問題とされた。(『参議院文部委員会会議録』第31号、1954年4月28日、pp.16-17：『参議院文部委員会会議録』第33号、1954年5月14日)

の正月紙面を中心に検証してみたい。

1946年に天皇・孝宮のツーショット写真と、女性の領域と仁慈を象徴化した皇后・娘たちの写真が発表されたのち、しばらくの間、元旦新聞に天皇と家族たちをいっしょに写した写真は載らない。『朝日新聞』では1947年1月1日、第1面にマッカーサー元帥の年頭の言葉を載せているが、天皇たちの姿はなく、3日に秩父宮後の近況を伝える写真が掲載されたのみである。だが『毎日新聞』では、第2面に「最近の天皇陛下——国民とむすぶ 地方行幸などに見る親愛感」という記事が天皇・皇后の写真入りで掲載されているから、この年の元旦に天皇たちが全く姿を消したというわけではない⁶²⁾【図版25】。興味深いのは、『毎日新聞』に掲載された天皇と皇后の写真が、形式的には新憲法発布に際して発表された新しい御真影と同様に、それぞれ別々の二枚の写真に撮られ同じ提示の方法を用いながらも、中味の彼らの像がまったく変わっていることである。天皇はもはや天皇服を着用せず、ネクタイを締めた背広姿であり、皇后は和装に似た襟の宮中服⁶³⁾である。わずか二ヵ月前に発表されたばかりのプロマイド化を宣言した御真影は使用されず、天皇・皇后の写真キャプションは、新春を迎えた彼らの年齢を伝えるのみである。

翌1948年から独立までの正月新聞では、皇太子が皇室の中心として可視化され、参賀の開始が報道されるようになる。『朝日新聞』の記事「教室の掃除もなされる いそがしく充実した学習の御日常」は、皇太子が写生した皇居の住まいの絵を小さく載せ、彼の日常生活を焦点化した。一方、『毎日』では、天皇「Hirohito」の署名を載せた。「これはたぶん国民の目にふれるはじめての天皇陛下のローマ字御署名であろう」と述べ、この署名がGHQ幹部に贈った写真に付けられていたものだと説明して天皇がGHQと親しいことをメッセージとして送り、皇后や皇太子の近況、歳末に詠んだ短歌などを紹介している⁶⁴⁾。いずれにせよ、こ

62) 1947年元旦の『毎日新聞』に登場した天皇・皇后の写真は、地方紙でも使用されている。たとえば『岩手新報』は第1面にマッカーサーの年頭挨拶を顔写真入りで載せ、その左横にマッカーサーの写真よりもはるかに大きく天皇・皇后と皇太子の写真を掲載した。だが、皇太子の写真は丸く枠取りされ、三人の空間は別々に切り離されたままであり、戦前の正月写真の様式を引き継いでいることがわかる。

63) 「宮中服」は、1944年10月に「ロープモンタント（通常服＝イブニング）に相当する服」として定められた袴式の衣服であり、皇族の中では皇后だけが専ら着用していたと言われ「皇后の服」として定着していた。儉約奨励のため国民にモンペを着ることが半ば強制されていた時期に、一反の着物地で作るこのモンペ・スーツの宮中服は、宮中のフォーマルウェアとして決められ、皇后は独立と同時に脱いだ。

64) 紹介された短歌は次の二首。「潮風のあらしにたふる浜松のををしきまにならへ人々」「冬枯のさびしき庭の松ひと木色かへぬをてかがみとはせむ」。いずれも松の「ををしき」や厳しい環境に耐えて自分を守り抜いている様を讃えているが、これが1946年正月の御製「ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ 松ぞををしき人もかくあれ」と呼応していることは明らかであろう。

の時期の元旦新聞には、「ご一家」としての皇室像は、まだ形成されていない。

新聞社による元旦新聞の天皇・皇室表象のばらつきは、1950年以降も続く。1950年1月1日、第1面は「自衛権を否定しない」というマッカーサーの年頭の辞の報道で共通するものの、『朝日』の第7面は孫と遊ぶやさしい祖父母としての天皇・皇后像を強調し、一方、『毎日』は、皇太子とそれに寄り添い見上げる天皇の大きな写真入りのカレンダーを元旦附録として付けた【図版26-27】。元旦附録写真のなかで、かつての天皇の地位のシンボルであった白馬に乗るのは天皇ではなく皇太子である。しかも天皇は、馬上の皇太子を後ろ向きになって地上から見上げており、優位性を与えられ中心化されているのは皇太子の方である。まるで天皇の威厳と権力は、皇太子に委譲されているかのようである。若い世代を暖かく見守る天皇像という点で、『朝日』の好々爺イメージと共通していると言えるだろう。

皇太子の中心化は、その翌年1951年の紙面でも共通している。1月1日の紙面では、「皇太子さま 今後の教育はどうなる 留学は急がない」（『朝日新聞』）にせよ、「希望に明けた“51年”の朝——ことし成年式の皇太子さま——“國体馬術の選手になりたい”」（『毎日新聞』）にせよ、中心は皇太子なのである【図版28】。『毎日新聞』の藤樫準二記者の署名記事は、写真に合わせて、皇太子が両親を訪ねだんらの時間を過ごす様子を次のように細やかな筆致で描写している。

「冬の陽ざしも暖い旧ろうのある日であった。お居間で陛下がニューズウィークをお読みになっているかたわらで、皇太子さまはレコード・ケースの中からベートーヴェンのシンフォニーをとり出され、電気蓄音器におかけになっていた。その演奏について、皇后さまと皇太子さまが感想を語っておられるのをおききになっている陛下のほおには時々微笑が浮かばれた。その微笑には、皇太子さまの御成育をお喜びになるお父君としての御愛情がしみじみと感じられた。」⁶⁵⁾

藤樫の記事には、①ニューズウィークを読み、手にする天皇像から強調される親米の姿勢、②ヨーロッパの古典音楽を愛する家族の西欧に価値を置く「趣味の良さ」、③現代的で洋風のライフスタイル、④世界情勢と家族を見守る天皇の愛情、が強調されている。息子と音楽について語り合う皇后の描写には、民主的で新しい母親像を読み取ることもできよう。そしてこの写真において、天皇一家の元旦写真に図像的に大きな変化が起こったことが注目される。初めて天皇・皇后・皇太子が同じ空間でくつろぐ姿が1枚の写真のなかに収められたのである。それは、これまで別々に枠取りされていた境界を取り払い、のちの正月「ご一家」

65)「ことし成年式の皇太子さま——“國体馬術の選手になりたい”」『毎日新聞』1951年1月1日2面。

写真の原型となるイメージであった。だが、この時点ではまだ順宮や清宮ら娘の姿はなかった。

天皇の「ご一家像」が登場するのは、独立前後になってからのことである。サンフランシスコ講和条約の発効によって独立を迎える1952年元旦の『毎日新聞』に、天皇・皇后・皇太子のほか、順宮、清宮、義宮の三人の兄弟姉妹を加えて6人の「天皇ご一家」写真が初めて登場したのである【図版29】。記事の見出しは「天皇ご一家の春——順宮さまも喜びの装い」である。このとき、戦後の元旦に発表される恒例の「ご一家」写真は完成したのであった。さらにこの写真は、いっしょに付けられた記事によって次のように物語化されている。

「年の瀬も押し寄せまったある日、御文庫にお集まりのご一家が冬の暖かい陽ざしをうけて内苑を散歩に出られた。御文庫の横で霜枯れの雑草の中に紅白の小菊を見つけになった順宮さまが『おお！可愛いこと・・・』とのぞきこみになった。それを見られて、植物学者である陛下が菊についての色々面白い話をされた。そのときの有様を皇后さまはこうおうたいになった。

おく霜に葉をそめながら菊の花／垣のかたへにまだもにほへる」⁶⁶⁾

御文庫に集まっていた天皇一家が庭に散歩に出たとき、順宮が紅白の小菊を見つけた。植物学者の天皇が菊について説明し、皇后が歌に詠んだという他愛もないストーリーであるが、菊が天皇家の紋章であることを考えると、そこに象徴化されている意味は明白であろう。占領下の厳しい日本の状況と国土を「霜枯れの雑草」に、目出度い色彩の紅白の小菊をこの年結婚する予定の順宮と成年式を迎える皇太子にたとえ、日本の独立にあたっての皇室の繁栄を讃えているのである。『朝日新聞』は『毎日新聞』の天皇一家のイメージをあとから追いかけるかのように、独立を経た元旦になって初めて「天皇ご一家」像の図像を完成させた【図版30】。

この1953年1月1日の写真と紙面は、実に象徴的である。大きく第3面の紙面を割いた記事「皇太子さまの御渡英」には、「御一家での楽しみ——御日程、たっぷり」という見出しも付けられ、『朝日』の元旦新聞に初めて「御一家」の文字が登場した。「皇太子御渡英コース」を示す地図は、日本が左端に置かれ、アメリカを中心としてヨーロッパの西端を描いた世界のイメージだった。そして、皇居の花蔭亭で撮られたという大きな写真には、巨大な地球儀を指差す皇太子とそれを見つめる天皇・皇后の三人が写っている。画面手前の円形のテーブルの上には、記事から推測するとおそらく天皇が皇太子として渡英したときのもので読み手に推測させるアルバムが広げられ、皇室の歴史の継承が物語化された。

66) 「天皇ご一家の春——順宮さまも喜びの装い」『毎日新聞』1952年1月1日7面。

「このお写真撮影は、平生お住まいの「お文庫」すぐわきの花蔭亭で行なわれたが、すでに国別の色あせた、古い、大きな地球儀を静かに回しながら、ここが大西洋、ここがサザンプトン、ここがロンドン、と指さされたという。陛下の御渡欧は、二十歳の春から秋にかけてだった。こんどの東宮さまは十九歳だが、同じ季節である。」⁶⁷⁾と、写真を物語化して描写する記者は、「渡欧」というキーワードを通して天皇裕仁のかつての若い日々を懐かしい思い出に変え、若き皇太子に独立を果たした日本の姿を重ね合わせている。直接聞いた者は誰もいない天皇の言葉——「日本人らしく、誠実に、おおらかに、各国のひとびとに接すること」は、皇太子に象徴化された独立後の日本に呼びかけた期待であり、地球儀を囲む皇太子たちの図像が示すのは、日本国家の独立と国際社会への復帰の祝福と、若い新生日本の登場と再生の決意である。

正月の「ご一家」像が登場する時期は新聞によって異なるので断言するのは難しいが、1951年から52年にかけて完成したとみなすことができよう。1951年には、注目すべきことに中学校の家庭科の教科書に「天皇御一家」の写真が登場している。教科書の検証を通して戦後50年の家族観の変化をたどろうとした酒井はるみの研究によれば、戦後、家族の領域が家族関係 (family relation) として日本の家庭科に初めて位置づけられ、戦後教育が出発したが、1950年代に入ると家族観が再編成される⁶⁸⁾。朝鮮戦争が始まり、「極東の防波堤」としての役割が期待されたこの時期に1950年に第二次教育使節団が来日して、「独立後の教育へのテコ入れを行ない、「民主教育」の推進が反共的役割を担うことを示唆した」からである。酒井が「この時期に至ってようやく、中学校も、そして中学・高校を通じて、民主主義にもとづく家族観や近代家族の理念を最もよく描きえた」と要約する1950年代前半に、まさに天皇一家像は正月メディアに浮上し、教科書においても登場したのであった。

山崎犀二の教科書『私たちの家庭』1、2、3 (中等教育研究会、1951年刊) は、一貫して伝統的な家族像にこだわっており、その傾向は「他の教科書と軌を一にしていない」(酒井)ものの、文部省の検定を通過している。そして、「この教科書はまた本文中でふれることなく、「天皇御一家」の写真に掲載しているが、その配置から推してよい家庭のモデルという意味づけを与えられているようである」と述べている。だが、教科書『私たちの家庭』に掲載された「天皇ご一家」写真には、嫁いだ娘やその子どもたちも登場しており、未婚の内親王しか含めない今日の「ご一家」写真とは構成メンバーも異なっている。まだ、「ご一家」像は形成途上なのである。「よい家庭のモデル」として天皇一家の写真が教科書に用いられたことは、伝統への回帰ではなく、戦後の新しい家族観の再編成の一環としてとらえるべきであろう。

67) 「皇太子さまの御渡英」「御一家での楽しみ」『朝日新聞』1953年1月1日3面

68) 酒井はるみ『教科書が書いた家族と女性の戦後50年』労働教育センター、1995年、p.89.

では、占領期に教科書にも登場し、正月新聞にも現われるようになった「天皇御一家」像は、上からの外在的な規範として押し付けられただけだったのだろうか？なぜ、この時期に「天皇御一家」像を（再）構築することができたのか？人々はなぜこの図像を受け入れたのか？それは敗戦直後の日本人が、「家族団欒図」を枯渇し希求していたからではないのだろうか？

ひとつ例を挙げよう。1949年秋、『美術手帖』に掲載されたある英文学者のエッセイである。18世紀英国の文化を研究する福原麟太郎は、ロンドンで見た「家族団欒図」の展覧会について文章を書いている。ある病院の資金募集のために、「コンヴァレシヨン・ピエセス家族団欒図」を集めサー・フィリップ・サスーンの豪勢な邸宅を開放して開かれたその展覧会は、「相当大枚な入場料を拂って、帽子を脱いでうやうやしく拝観するといった印象」があった。ドイツ人の心理学者を誘って展覧会を見たが、彼には面白くなさそうなことが不思議だったと感想を述べたあと、ヨーロッパにおける家族団欒図の歴史を解説して、福原は、次のように家族団欒図に対する渴望を吐露している。

「その中に一八世紀の生活の色や香が、こぼれあふれる迄に満ち満ちていたためであったと思う。その中に私は甚だ自由に入り込むことが出来た。

私達はいま、そういう絵に、なかなか出会わさない。われわれの生活とつながっている絵。それは、絵の具箱をぶちまけたような絵でもマッカーサーを描いた絵でも構わない。…（略）…私は、そういう我々の生活とつながったものがほしいと思う。」⁶⁹⁾（傍点は引用者）

「絵の具箱をぶちまけたような絵でもマッカーサーを描いた絵でも構わない」から、「そういう我々の生活とつながったものがほしい」という福原が、天皇御一家の団欒図を求めていたと断言するつもりは全くないが、生活とつながり、しかも時代の精神を伝える美しい色香に満ちた家族団欒図を求める切迫感が文章からは伝わってくる。絵を見るのが下手で美術眼がないとあきらめていた彼が、昔安心して眺めた家族団欒図の記憶を呼び覚まし、渴望する様子が見えるのである。10年後のミッチーブームを迎える以前の、占領末期から独立にかけての時期に、天皇一家の家族団欒図は、福原のような日本人の渴望に応えたのではないだろうか。「ファミリー・オブ・マン」展が日本で大勢の観客を集めたのは、それから数年後のことだった。

69) 福原麟太郎「家族団欒図」『美術手帖』1949年9月号、vol.21、p.41.

(2) 創出された「一般参賀」——天皇の現前性の保障

一方、占領期の正月には、天皇の表象に関してもうひとつ大きな変化があった。それは1948年から始まった「国民参賀」——今日の「一般参賀」へとつながる新たな表象システムの創出である。1948年の1月3日、各紙は「開放された二重橋」に押し寄せる人波の写真を紙面に掲載した【図版31】。新聞によっては必ずしも大きな扱いだっただけではないが、今日の「一般参賀」の原型が始まったのである。当時は「国民参賀」と称し、48年には元旦と二日の両日にわたって行なわれた。元旦は正午から正門が開門される予定だったが、午前9時には2千人ほどの人々が集まっていたため開門時間をくり上げられ、約6万人が二重橋を渡って参賀に訪れ、1万8399名が天皇・皇后・皇太后への参賀簿に住所と氏名を記帳したと報じられている⁷⁰⁾。当初、二重橋を渡って参賀後ふたたび二重橋から帰す予定だった経路も、参賀者の数が予想以上であったため混雑を恐れて変更し、坂下門から退出させるなど、初めての国民の参賀という儀礼の創出は波乱含みでありながらもひとまず成功裡に終わった。翌1月2日はさらに人出が増え、午後には天皇・皇后が突然群衆の前に現われたと、『毎日新聞』は伝えている⁷¹⁾。

「後尾の列ははるか大手町まで達し、余りのにぎわいの午後一時四十五分なんの前ぶれもなく、突然天皇陛下が皇后さまと豊明殿の焼跡を隔てた内庭庁舎の屋上にお出ましになり、たれかが見つけた陛下のお姿に『天皇陛下万歳』と叫べば群衆にこたえて天皇陛下も右手に握った中折帽を、皇后さまは手を挙げてごあいさつになって、午後二時十五分お帰りになった」（『毎日新聞』1948年1月3日）

70) 「続々と二重橋を渡る」『毎日新聞』1948年1月3日2面。

71) 1948年1月3日の『毎日新聞』では、天皇・皇后が1月2日に内庭庁舎屋上に姿を見せ、歓呼に応えたことになっているが、皇后がいつからいっしょに登場するようになったのか、資料により異なる。『皇室大百科』（砂田久政総編集、日本防衛協会発行、1975年、p.312）によれば、「両陛下おそろいでのお出ましは昭和二十六年から」としており、『天皇家の仕事』（前掲、高橋紘、p.153）も51年から「皇后も一緒に四回の“おでまし”があった」と述べ、宮内庁のホームページでも「昭和26年1月1日、庁舎中央玄関上のバルコニーにおいて、昭和天皇・香淳皇后が参賀者の前に初めてお出ましになりました」と発表している。だが、『朝日新聞』1950年1月3日の記事「雨中の参賀一万五千」でも、一般参賀に「午後二時、こうもりをさゝれた両陛下がおそろいで宮内庁舎西側の屋上にお出ましになると、参加者の中から期せずして、“万歳”の声わき上がり、陛下は約十分の間、帽子を振って歓呼にこたえられた」と述べ、天皇と皇后がそろって参賀に姿を表わしたことを報じている。これらの「起源」のばらつきは、公式に天皇・皇后が正月の一般参賀に姿を表わすようになったのは1951年であるが、それ以前は非公式に（あるいはこっそりと）彼らが参賀を見ることから始まりやがて積極的に身体を晒すシステムへと移行したことを物語っている。

当時、宮内庁舎三階の一室が公務をとる表御座所^{おもてござしょ}に当てられており、天皇は参賀の様子を見ようと吹きさらしの庁舎屋上に前ぶれもなく出たのであった。このときの状況について高橋紘は「ほとんどの人が天皇が吹きさらしの屋上にいようとは思ってもみなかった」と述べているが、たとえそうであったにせよ、また天皇の登場が制度化されてもおらず偶然であったにせよ、このとき、正月に皇居で天皇たちが国民の前に姿を見せる一般参賀の萌芽が芽生え始めていたと言えるだろう。発表された写真は、象徴的なことに二重橋を渡っている人々をとらえるにとどまり、記帳する人々を写してはいない。まずは、二重橋の向うの世界が「一般国民」に開放されたことに大きな意味があったのである。国民の前に現前する天皇・皇后と人波をひとつのフレームのなかに収めた今日見る参賀の写真の原型は、独立後「一般参賀」としてスタートするときまで待たなくてはならない。

では、「参賀」とはどのような制度なのだろうか？ 今日催される元旦の「新年祝賀の儀」とどのような関係があり、また「朝賀の儀」や「拝賀」とどのように区別されるのだろうか？⁷²⁾ここで簡単に宮中における新年の儀礼をまとめてみたい。皇室の新年祭祀は、まず四方拝から始まる。「午前五時半、夜がまだ明けきらないうちに、天皇は伊勢の神宮をはじめ四方の神々に年初の参拝をする。続いて歳旦祭。天皇、次に皇太子が宮中三殿の賢所から順次参拝し、国家の繁栄と国民の安寧を祈願する」⁷³⁾。そしてその後続く祝賀行事が「新年祝賀の儀」と呼ばれている儀式である。

今日行なわれている「新年祝賀の儀」は、憲法7条の国事行為のうち最後の10号「儀式を行うこと」にあたり、「毎年1月1日、皇居において、天皇陛下が皇后陛下とご一緒に、皇太子殿下をはじめ皇族方、衆・参両院の議長・副議長・議員、内閣総理大臣、国務大臣、最高裁判所長官・判事、その他の認証官、各省庁の事務次官など立法・行政・司法各機関の要人、都道府県の知事・議会議長、各国の外交使節団の長とそれぞれの配偶者から、新年の祝賀をお受けになる」（宮内庁ホームページ）。儀式は、皇太子をはじめとした皇族から始まり、「元皇族、元王公族及び御縁故の向き」の「私的行為」としての祝賀の儀に続き、再び国事行為の内閣関係者、国会関係者など合わせて6回に分け「松の間」などにおいて行なわれる。

「新年祝賀の儀」の紀元については古くは神話の時代にまでさかのぼるとされるが、明治

72) 井原頼明『皇室事典』（富山房、1938年、p.60）によれば、「朝儀」「拝賀」「参賀」は次のように説明されている。「朝儀 皇室儀制令で定められた諸儀式をいふ」、「拝賀 儀式の場合天皇、皇后、皇太后三陛下に拝謁して御祝詞を言上すること」、「参賀 儀式の場合御祝詞言上のため参内、拝謁のことなく東車寄に御備付の参賀簿に自己の身分氏名を記入すること」。

73) 前掲、高橋紘『天皇家の仕事』p.136.

以降に徐々に形式を整えられてきた制度である⁷⁴⁾。1868年（明治元）元旦、小御所の上段に出御した天皇は、「簾中に於て朝賀」を受け、元旦と二日に続く拝賀の儀の大枠は制度化され、同年には早くも正月行事の次第が布告された。1872年（明治5）、英米仏伊など7カ国の外国公使が初めて参列し、1876年に現在と同様の拝賀の順序（皇族—大臣—在京勅任官—外国公使）が決められる。1926年（大正15）には、皇室令7号「皇室儀制令」ができ、新年朝賀を元旦と2日に宮中で行なうことや席次、服装などが細かく定められた。儀制令によれば、「新年朝賀の儀」は位によって「拝賀」と第七階以下の「参賀」に分かれていた。1938年（昭和13）に出版された『皇室事典』では「新年朝賀の儀」について、「新年式は年頭に當つて宮中における最も重要な御儀式であるのは申すまでもなく、一日に始まり五日の新年宴會をもつて御終了となるのであるが、宮中では先づ朝賀の儀を一日及び二日に互つて行はせられる。往昔は「みかどをがみ」と稱せられた御儀である。この朝賀の儀は拝賀、参賀に分たるが…（皇室儀制令第二條並に同令附式参照）」（傍点は引用者⁷⁵⁾と、説明している。

古くは「みかどをがみ」と呼ばれたこの儀式は、身分の違いによって「拝謁」「参賀」の区分だけでなく、それぞれの順番も厳密に分けられていた。1月1日午前10時、親王以下皇族から始まる拝賀は、元旦に5回、2日に2回にわたって行なわれたが、一方「参賀者」は、天皇と直接顔を合わせて挨拶する拝謁を行なうことなく、1月2日に宮中へ参内し、「東車寄に御設けの参賀簿（奉書を縦二つ折にして横帳としたるもの）に署名して退出する」だけであった。「新年の拝賀」は占領中も規模を小さくして宮内省庁舎内で行なわれていたそうであるが、

74) 祝賀と参賀については、前傾、高橋紘『天皇家の仕事』Ⅲ-2章を参照。

75) 前掲、井原頼明『皇室事典』、pp.133-134。同書（pp.134-135）によれば、当時の1月1日・2日の拝賀と2日の参賀のスケジュールは次の通りである。

「一月一日の拝賀」

午前十時	親王以下皇族、王族、公族
同十時十分	大勲位以下公爵、従一位、勲一等以上並夫人、勲一等外國人同夫人
同十一時	高等官一等以下勅任官待遇以上並夫人、神佛各宗派管長、勅任拔雇外國人同夫人
同十一時五分	宮内奏任官同待遇
午後一時三十分	本邦駐割各國交際官同夫人

一月二日の参賀

午前十時	伯爵以下従四位以上並夫人 勲二等勲三等外國人並夫人
同十一時	貴族院議員、衆議院議員、高等官三等以下同八等以上及び該當の待遇を享くる者並高等官九等、功四級、功五等、勲四等以下勲六等以上、正五位以下従六位以上の有位有勲者、奏任待遇の神職、門跡寺院の住職、奏任拔雇外國人、勲四等以下勲六等以上の外國人」

「一月二日の参賀（宮中の参賀は一月一日には行はせられない）」

午後一時より四時まで 正七位以下従八位以上、功六級、功七級、勲七等、勲八等、奏任待遇」

後者の「参賀の儀」が戦後1948年から始まった「国民参賀」へと名前を変えて引き継がれたわけである。そのような歴史を振り返ってみれば、48年に「一般国民」に上げられた「国民参賀」が、天皇を直接見ることもなく二重橋を渡って記帳するだけの行為として始まったことも理解できるだろう。だが、「国民参賀」は、皇居で記帳できる人々の範囲を広げるだけでなく、独立にいたるまでの間に、さらなる「進化」を遂げなくてはならなかったのである。では、48年以降の参賀はどのように変化したのだろうか？

1949年の元旦も天皇は侍医寮の屋上に立ち、国民の前に姿を表わした。GHQはこの日、国旗の掲揚を許し、天皇を中心とした戦後復興を期待した。だが1949年1月3日の新聞は元旦の記帳者数を報じるのみで、天皇と家族たちが紙面に姿を現わすことはなかった⁷⁶⁾。天皇は1950年にも侍医寮屋上に立ち、51年には「もっと国民のそばへということから、宮内庁玄閣上のひさしの上に出た。皇后も一緒に四回の“お出まし”があった」⁷⁷⁾。52年は皇太后（貞明皇后）の死去で中止となったが、1953年には元旦を国儀の新年祝賀とし、一般国民の参賀は1月2日のみに開催日を縮小された。1948年に始まった「国民参賀」は53年から「一般参賀」に名前を改められ、今日にいたっている。「国民参賀」の人数は新聞報道によれば、1948年元旦と2日の両日で合わせて13万人だったが、49年に3万人、50年に1万5000人と人数を大幅に減らしている⁷⁸⁾。51年には参賀に天皇・皇后が姿を表わすことが元旦の『朝日新聞』で報じられ⁷⁹⁾、1952年、日本の独立を機に吉田内閣は「憲法第七条により、天皇は毎年元旦宮中において新年祝賀の儀を行い、これを国事」とする閣議決定を行い、戦前の「新年朝賀の儀」は「新年祝賀の儀」として再構築された。

1953年、独立後はじめての正月には、約64万人もの人々が「一般参賀」に訪れた。この日、

76) 『毎日新聞』では、1949年1月4日にスキーで転ぶ皇太子の写真と記事を載せている。「皇太子さま初轉び——志賀高原でスキー練習」。キャプションは「おっとしまつた、見事尻もちをつく皇太子」であり、毎日新聞特派員による撮影であることが書かれている。

77) 前掲『天皇家の仕事』、p.153。

78) 1948年の参賀者の数字も諸説ある。1949年1月3日の『朝日新聞』は、「皇居へ三万名——元旦の記帳者」の記事には次のようにある。「皇居が国民に解放されて満一年の一月一日、今年も一般の参賀記帳が許されて午前九時から参賀の人並みが二重橋を渡つていった。朝来の雨にはままれて午前中はわずか千人ぐらいだったが、午後雨があがるとともに人足もグンとふえ午後四時十分の門限までに記帳した人数は丸の内署の調べによると約三万六千三百人に達した。しかし去年の一日、二日合わせての十三万人とくらべるとはるかにすくなかつた。なお天皇陛下は午後二時すぐ宮内府庁舎の屋上に出入られて國民の奉賀にこたえられた」。

だが、前掲『天皇家の仕事』（p.152）では1948年正月の参賀人数について、「初日は推定で七万人、二日は十四万人」としている。拙論では前記の朝日新聞の数字を採った。

79) 1951年、52年の参賀者の数字は朝日新聞では発表されておらず、不明である。

天皇はモーニング、皇后は1944年から着ていた宮中服をやめて和服姿で宮内庁玄関バルコニーの立った【図版32】。皇后の和服は、日本の民族性と伝統を強調するメッセージを送った。

正月に行われる国民の参賀とは、1948年当初には、二重橋を渡って記帳する行為を指していたのであり、天皇・皇后の現前性は制度化されていなかったが、1952年から天皇・皇后の「お出まし」が予告され制度化されたことにより、正月の参賀は天皇表象において質的变化を遂げたと言えよう。民衆の前に直接姿を現わし効力を発揮した天皇の全国巡幸の力は、今度は天皇が地方へでかけるのではなく「国民」の側から皇居にでかけ天皇たちを祝賀するという行為上も意味上も変質した「一般参賀」へと人々をひきつけることになった。つまり、元旦の「プライベートな天皇ご一家」写真の公表と、続く1月2日の一般参賀によって保障された天皇・皇后のパブリックな現前性というふたつの表象システムが完成したのである。

(3) 正月メディアにおける天皇一家・皇室の表象（1953年以降）

「プライベートな天皇ご一家」写真と「パブリックな皇室」の一般参賀という制度が整った独立後、正月における皇室の二種類の表象システムはどのような変遷を見せたのだろうか？ 64万人の参賀者を記録した翌年1954年も、宮内庁玄関バルコニーに立つ天皇・皇后を見ようと38万人の人々がつめかけ、二重橋上で押し寄せる人波の下敷きとなって死者16名、重軽傷者64名を出す大惨事が起こった。この日、天皇・皇后は午前10時を最初に7回にわたり登場していた。

新春の「天皇ご一家」写真はその後図像的变化を見せながらもしっかりと定着し、一般参賀は、50年代には場所を宮内庁前広場から明治宮殿跡に移しお立ち台を設けるなど、演出空間として発展を遂げ、60年代には皇太子夫婦も新たに加わって元旦写真とは構成メンバーも異なるパブリックな皇室の側面を強く打ち出すようになった。天皇と皇后だけ姿を現わしていた一般参賀の登場人物が増えるのは、1960年正月からである。1月2日、服喪中の皇后と妊娠中の美智子妃は姿を見せなかったが、天皇のほか、義宮、清宮、皇太子（午後から）たちが午前3回、午後5回にわたって登場した。そして、現在では長和殿ベランダへの7回の「お出まし」が恒例化している。

このふたつの表象システムの特徴から時期を区分すると次のように分けられる。1945年の敗戦から47年までを戦争に負けた天皇像と性差境界の動揺の第一期として特徴づけるとすると、48年から独立を迎える52年までの第二期は、元旦新聞における皇太子の中心化と、参賀のシステム整備の時期として要約できるだろう。独立後から現在にいたるまでを五つの時期に分けると、第三期（1953-59年）は、プライベートな「ご一家」写真の定着と、一般参賀開始、第四期（1960-68年）は、昭和宮殿造営のため一般参賀が一時中止（1964-67）された

が、若い一家（美智子妃）の元旦写真への登場と、皇太子夫婦も参賀に加わったパブリックな「皇室」像の構築として特徴づけられる。1968年秋に完成したばかりの昭和宮殿で初めての一般参賀を迎えた1969年1月2日、奥崎謙三が天皇をめがけてパチンコ玉四発を発射する「パチンコ玉事件」が起こり、翌年からは防弾ガラスでお立ち台は覆われるようになった。第五期（1969-81年）は、「パブリックな皇室像」（ガラス越しの皇室）の発展と参賀者の減少、参賀に日の丸登場、第六期（1982-89年）は、不人気の一般参賀に対して天皇の「お言葉」という装置が発明され、昭和の終焉を迎えた時期、第七期（1990-現在）は、さらに細分化できるがともかく新しい平成の時代として括っておこう。

もちろん第三・四期には1953年から始まったテレビ放送と皇太子成婚をきっかけとした受像機の家庭への急速な普及によって、皇室のイメージ形成においてテレビが新聞以上に人々に大きな影響を与えるようになったことは周知の通りである。1959年春の皇太子成婚パレードの中継と、それに先行して始まった「皇室」と「国民」の恋愛ドラマは、かつての街頭テレビ時代の主役を次のヒロインの美智子妃へと交代させた。皇太子結婚を間近にひかえた1959年の正月の朝、テレビは皇室の様子を全局あげて伝えている。当時テレビは三局とも全て朝7時から放送を開始していたが、KRテレビでは、「伊勢神宮元旦風景<迎春>」を一時間放映し、NHKテレビではニュースのあと、「おめでとう昭和34年」で東京タワーと伊勢神宮を紹介して、新しい日本の俯瞰図と皇室の「起源」とされる荘厳な神域を描き出した。

「おめでとう昭和34年 NHKテレビ前7・15

新装なった東京タワーと伊勢神宮の二カ所を結んで西と東の新春風景を紹介する。まず東京タワーからは地上二百四十メートルの第二展望台と地上百二十メートルの第二展望台にカメラを置き、明けゆく昭和三十四年元旦の都内および近郊、東京港の風景をとらえ、山本嘉次郎夫妻、漫画家根本進一家にインタビューする。また、伊勢神宮からは荘厳な神域にくりひろげられる数々の儀式や元朝まいるの人々をとらえる。」⁸⁰⁾

天皇の身体と空間が、テレビというネーションワイドな新しいメディア・テクノロジーによって視覚化され、焦点化される様がこの番組案内の短い文章からは伝わってくる。

このNHKの「おめでとう昭和34年」が終わると、今度は日本テレビが「日本のホープ皇太子」（15分）を流し、午前10時代には宮内庁から「皇居風景」（KRテレビ）と宮内庁楽部の「雅楽」（NHK）が放映されているから、人々は元旦の朝からほとんど絶え間なしに天皇にまつわるテレビ画面を見せられ続けたことになる。一年の始まりは、伊勢神宮と皇居を神

80)「[みもの] おめでとう昭和34年」（ラジオ・テレビ番組欄）、『朝日新聞』1959年1月1日、第8面。同番組は、元旦の朝7時15分から8時15分まで放送。

話の歴史をなぞるかのように番組編成の時間的流れのなかに置きながら、幕開けしたのだ。

翌日1月2日も午前10時台に、宮中での参賀風景が全局でテレビ放映されている。NHKの「日本の新春」は、東京、札幌、名古屋、大阪、福岡の5局を結んでリレー放送を行ない、「東京は「宮中参賀風景」で、陛下が御立台に立たれる時刻に合わせて、国民の参賀風景と大内山の松の緑を紹介」することが、番組欄を通して予告された。他局も、座談会「皇太子御成婚に望む」「宮中参賀」（以上日本テレビ）、「新春参賀」「座談会・皇太子に望む」（KRテレビ）を放送し、午前10時前後の時間帯は皇室一色であった。その後、テレビ受像機は1960年代以降一気に日本の一般家庭に広く浸透するのであるが、新春の皇室放送は恒例の番組として定着していった。テレビがナショナルなメディアとして生活のなかに根づくと同時に、ナショナルな意識は新しいジャンルの番組や映像だけでなく、番組編成のあり方そのものも通して形成されていった⁸¹⁾。もちろんここで言うナショナルな意識とは、皇室報道のような狭義のナショナルリズムだけを指しているのではない。普段とは全く異なった番組編成を行なうことによって、正月のテレビ空間は「祝祭」の場へと演出されるのであるが、放映時間は短くとも祝祭の欠かせない装置のなかに、新春を迎える天皇一家の姿と一般参賀の風景が中核を占めることになったのである。本稿ではナショナルメディアとしてのテレビの形成と機能についてはこれ以上論じる余裕はないので、新聞やテレビなどにおいて表象され続けてきた天皇一家と参賀について、図像から見られる特徴をまとめておこう。

まず、GHQによる日本占領が終わる頃形作られた元旦に発表される「天皇ご一家」像の特徴について、「天皇ご一家」写真の変遷を『朝日新聞』を中心に概観してみよう。大きな地球儀を囲んで日本の独立と国際世界への復帰を祝福した1953年元旦以後、1959年までは、プライベートなご一家元旦写真が定着する時期である。皇居内の庭で一列に並ぶ一家や、それをカメラで撮影する皇太子（54、56年【図版33】）、室内のソファで将棋に興じ水入らずの団欒を過ごす一家（55、57、58年【図版34】）の二種類の図像が登場し、いずれにおいて

81) 吉見俊哉は今日のテレビ文化研究について、それぞれの番組ジャンル内に閉じた映像テキスト分析に陥る傾向を指摘して、テレビがナショナル・メディアとして生活のなかに根づいていったことを認識する必要性を次のように述べている。「・・・テレビが根本的に時間的なメディアであること、つまりそれぞれの映像テキストが単に時間的に構造化されているだけでなく、そうしたテキストの時間が一日の放送の時間構造のなかに位置づけられており、さらにそうした構造に媒介されて営まれる社会関係の時間的営みのなかで消費されていることを十分に認識しておく必要がある。そしてこのように視野を拡張していくなら、それぞれの家庭の生活の時間や生活史（ライフ・ヒストリー）の時間と、テレビのなかで語られるフィクションの時間（たとえば、ナショナル・ヒストリー）との関係が、テレビ研究のきわめて中心的な問題として浮上してくるのである。」（吉見俊哉「テレビが家にやって来た——テレビの空間、テレビの時間」『思想』岩波書店、2003年12月号、p.43）

も皇太子が中心化された。また、末娘清宮が両親が座るソファの端に軽く腰をかけるなど、カジュアルなライフスタイルも見せている（58年【図版35】）。1959年に結婚式を挙げ皇室の一員となる正田美智子は、59年の元旦ご一家写真にはまだ入らず、紙面の第1面で「“よい家庭”をつくりたい⁸²⁾」と新聞社のインタビューに答えて抱負を語っている。

1960年から美智子妃や新しく誕生した孫たちが一家写真に加わるようになると、アルバムを見たりゲームを楽しむ幼い子どもを中心とした三代の家族の団欒が演出されるようになる。だが、初めて「庶民」から皇室入りした皇太子妃美智子は、当初はひとり跪き他の家族から見下ろされていた。1960年元旦の写真では、皇太子が構えるカメラを、植木を前にした美智子妃が下から見上げ、その光景を他の家族がまなざすという視線の錯綜した構図となっている【図版36】。61年には、天皇と皇后の間で遊ぶ浩宮を中心に、皇太子と義宮が画面右端でソファに腰掛け、左端では美智子妃が椅子もなく直接絨毯の上に跪いている【図版37】。その後も家族は、浩宮が池に浮かぶマガモやオシドリに餌をやったり、レコードプレーヤーや積み木、将棋で遊ぶシーンなど、場面設定を少しずつ変化させながら「団欒」を演出していった。これらの写真で重要なのは、彼らの存在する空間があくまで皇居内にとどまっているということである。決して本物の富士山を背景にして記念写真を撮ったり、旅行に出かけたりすることはなく、皇居内においても拝殿を背景にすることもない。また、彼らがアルバムをいっしょに見るシーンが何度もくり返されていることも注目される。「ご一家」写真は、家族一緒に懐かしく振り返ることのできる「よい家庭」の象徴でなくてはならないからだ。表象がパターン化されるにつれ、70年代末には紙面の扱いはどんどんと縮小され、一段の小さな写真が掲載されるのみになる【図版38】。

1980年代に入り、記事と写真は少し大きくなるものの、もはや成長した子どもたちが中心化されることはなく、横一列に並ぶ「ご一家」写真が続く（81、82、83、84、85、86年。昭和天皇が登場する最後のご一家元旦写真は、1988年である。この年は、横一列の家族写真だけでなく、アルバムを睦まじく眺める天皇・皇后の姿のみを映し出した元旦写真も登場した⁸³⁾。彼らにとって最後となる元旦写真が、アルバムを眺める天皇・皇后であったということも興味深い。この1988年は一般参賀の様子を報じた1月3日の新聞でも、天皇は大きく取り上げられ、手術後初めて国民の前に姿を現わした写真が各紙第1面を飾った。1989年、死の間際にある天皇とその家族の写真を宮内庁は発表しなかった。「宮内庁は、新年を迎える皇室ご一家の写真を元旦付で発表していたが、今回は撮影せず、病状急変の前に陛下が詠まれ

82)「“よい家庭”をつくりたい 責任と期待、楽しい日々——正田美智子さんにアンケート」『朝日新聞』（東京）1959年1月1日1面。

83)『朝日新聞』は、アルバムを眺める天皇・皇后の写真を載せ、『読売新聞』は横列に並んだご一家写真を掲載した。『毎日新聞』は、両方掲載している。

たお歌だけを発表した」(『朝日新聞』1989年1月1日)。一般参賀もこの年は「お出まし」が取りやめられたため、記帳のみの「静かな参賀」風景が報じられた。

昭和天皇の死後、初めて迎える1990年元旦のご一家写真は、新しい天皇・皇后と、英国留学中の礼宮を除く子どもたち——皇太子・紀宮の四人だけが登場する。年末の挨拶に皇太后の住む吹上御所に向かうため、赤坂御所玄関を出るところである。その後も皇太后は2000年に亡くなるまで吹上大宮御所で暮らしたが、もはや彼女は二度と「ご一家」写真に加わることはなかったのである。平成の天皇ご一家写真は、1991・92年は、新しく皇室に入った秋篠宮妃紀子を交えて庭で撮影され、内親王の誕生した93年からは室内に場所を移し、子ども中心の図像へと変わった。天皇・皇后と皇太子一家を中心化し、次男一家を周縁化するのは1960年代の皇室表象と同じパターンであるが、背景の暖炉や豪華な飾りを施したグランドピアノなどは姿を消し、家具はシンプルになり、窓の障子が背景の定番となった【図版39】。93年以降、「天皇ご一家」は外に出ることなく、室内のみの団欒風景がくり返され、巨大化したローテーブルの向う側で幼子やアルバムに視線を集中させ、あるときはこちら側を見つめるのである。

1953年前後に(再)構築されたこのプライベートな天皇の「ご一家」像は、戦前の家族写真と基本的に同じ構成員を引き継いでいる。登場するのは、天皇、皇后、息子たち、未婚の娘たちであり、昭和天皇の死後も皇太后は相変わらず姿を見せていない⁸⁴⁾。だが、一枚の写真の中に収められた「ご一家」のイメージは、戦前とはかなり異なったものとなっている。それは、落合恵美子の近代家族の特徴を援用して述べるならば、第一に、家族成員相互の強い情緒的關係、第二に子ども中心主義、第三に家族の集団性の強さ、第四に非親族の排除、第五に核家族中心、として特徴づけることができるだろう⁸⁵⁾。(ただし、家庭における家族写真という場面の設定上、近代家族の特徴である「男は公共領域・女は家内領域という性別分業」は、1946年の元旦写真を唯一の例外として、正月写真では露骨に表現されていない⁸⁶⁾。)とりわけ、家庭の内側へ向かう彼らの視線と閉鎖的空間は、写真を見るものに一種のヴォイヤリズム的快樂を与えていることも見落としてはならない。皇室の秘匿性への国民

84) 皇太后が姿を見せない理由は、貞明皇后の場合には、まだ戦後の元旦での「天皇ご一家」写真が構築されていない占領中の1951年にすでに死去していたこと、皇后良子の場合には認知症という病気に起因すると一般には考えられている。だが、家族写真における皇太后の不在は、天皇制という制度のあり方そのものから考察されるべきであろう。

85) 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989年、p.18.

86) だが、幼児を母親のみが抱くなど、性別役割分業がまったく正月写真に表象されていないわけではもちろんない。正確に言えば、天皇ご一家写真は、夫婦と子どもから成る「核家族」ではなく、結婚していない娘や弟一家も含まれる。

のヴォイヤリズムは、元旦写真に続く一般参賀の儀式によって、ただちに「開放」へと誘導されるよう構造づけられている。

独立後、正月新聞での皇室イメージは、元旦に発表される「プライベートなご一家像」と2日に催され翌日掲載される一般参賀の「パブリックな皇室像」という二種類の表象に集約して構築されてきた。一般参賀の始まりは1948年である。当時は「国民参賀」と呼ばれ、元旦と2日の両日にわたって行なわれた。1952年は皇太后（貞明皇后）の死去のため中止となったが、1953年からは1月2日のみに縮小・変更され、「一般参賀」の呼称に変わった。1日と2日に公的に創造された「プライベート／パブリック」な皇室のイメージの構築は、独立と同時に完成したと言える。この二種類の皇室像は、元旦の「ご一家」写真が、①プライベート、②子どもを含む、③<家>の内方で撮影、④背広・ワンピース・スーツなどの服装、⑤アルバムや幼い子どもに視線が集中する、⑥親密性・くつろぎなどを特徴とするのに対して、後者の一般参賀での皇室像は、①パブリック、②成人のみの皇族、③お立ち台を見上げて撮影、④モーニング・ドレス、⑤国民を見下ろす視線、⑥威厳・緊張などを特徴とする⁸⁷⁾。子どもの存在の有無、服装、視線、場の設定などを通して明確に差異化された二種類のイメージは、独立後の皇室像の基本パターンを作ってきたと言えよう⁸⁸⁾。かくして、今日見られる元旦の「天皇ご一家」とその後の一般参賀の図像は完成されたのである。

だが、この安定したかのように見えた図像は、2006年9月に秋篠宮家に男子が誕生したことによって大きな変化を見せている。それまで天皇・皇太子一家の後ろに立っていた秋篠宮家（特に秋篠宮・同妃・悠仁親王）が、2007年の正月以来、前列に並んで座る図像に変わったのである【図版40】。さらに次の代替わりでは「ご一家」写真は、従来通りの規則を踏襲するのであれば、秋篠宮一家は写真から退場しなくてはならないが、未来の皇位継承者がいっしょに消えるわけにはいかないはずである。また皇太后存命の場合、はたして従来のように「ご一家」

87) 一般参賀での皇室の並び方にも、権力構造がある。天皇（左）・皇后（右）を中心として、天皇の左側に皇位継承者である皇太子が立ち、その左側（＝周辺に向かう）に皇太子妃が立つ。一方、皇后の右には次男夫婦が並ぶ。

88) 今日では、一般参賀の光景に日の丸を打ち振る人々の姿は必ず映し出され、お立ち台の皇族とその下に位置する日の丸の旗は分かちがたいものとしてセットになっている感があるが、国旗は最初から存在していたわけではない。占領中から行なわれた庁舎中央玄関上のバルコニーでの一般参賀を写した写真を見ても、日の丸はほとんど見当たらず、大勢の群衆は日の丸ではなく手を振り万歳をしている。日の丸が恒常的に参賀の写真に登場するのは、1970年代前半である。朝日新聞の1月3日の一般参賀の報道では、1972年、突然フレームの中に2、3本の日の丸がニョキニョキと生え出すかのように現われ、翌年には数を増し、74年にはフレームを埋め尽くすようになる。もちろんこのことは、それまでの一般参賀で日の丸がなかったということを意味するのではない。だが、正月の一般参賀の表象として、今日では当然のように考えられている日の丸の旗が、1970年代初頭までは必然とされたわけではない、ということは言えるだろう。

写真から排除することができるだろうか。明治以来、父から息子へとわかりやすく直系家族でのみ皇位継承を視覚化していた「天皇ご一家」写真は、悠仁親王誕生以来、図像として混乱し破たんしているのである。今、「天皇ご一家」表象は大きな過渡期にあると言えるだろう⁸⁹⁾。



【図版1】新しい天皇服制定を伝える記事とイラスト
 (「新に天皇服を御制定」『朝日新聞』1945年11月8日
 朝刊2面)



【図版2】1945年11月7日制定の新しい天皇服
 (北村恒信編『陸海軍服装総集図典』図書刊
 行会、1998年、p.242)



【図版3】新しい天皇服で東京駅を歩く天皇
 (「天皇陛下伊勢に行幸」『朝日新聞』1945年11月
 13日朝刊1面)



【図版4】「伊勢の神宮御親拝」
 『朝日新聞』1945年11月14日朝刊1面)

89) 天皇ご一家表象についての主要な拙論は以下の通りである。北原恵「正月新聞に見る〈天皇ご一家〉像の形成と表象」『現代思想』2001年6月；北原恵「表象の“トラウマ”——天皇／マッカーサー会見写真の図像学」『心の危機と臨床の知①——トラウマの表象』森茂起編、2003年、新曜社；北原恵「皇室改革」という言説——宮内庁ホームページに見る皇室表象」『現代思想』2004年6月号；北原恵「皇室の出産・生殖をめぐる表象分析」『国民国家と家族・個人』（比較家族史学会監修「シリーズ比較家族」Ⅲ3）、早稲田大学出版部、2005年；北原恵「消えた三枚の絵画——戦中／戦後の天皇の表象」『岩波講座：アジア太平洋戦争——戦争の政治学』倉沢愛子他編、岩波書店、2005年；北原恵「元旦新聞にみる天皇一家像の形成」『性の分割線』（日本学叢書2）青弓社、2009年



【図版5】「靖国神社御親拝」
『朝日新聞』1945年11月21日朝刊1面



【図版6】新しい御真影
（「平和日本の象徴」『毎日新聞』1946年11月3日朝刊1面）



【図版7】敗戦後、初めての元旦新聞に登場した天皇と家族
（「帽子を脱いで御答禮——天皇陛下に新聞記者団拝謁」
『朝日新聞』1946年1月1日朝刊2面）



【図版8】「天皇陛下・孝宮様と御散歩」
（『朝日新聞』1946年1月1日朝刊2面、使用図版はサンニュースフォトス『天皇』トッパン、1947年、p.31）



【図版9】「養鶏に御給餌中の皇后陛下、右より順宮、清宮、孝宮の三内親王様」
（『朝日新聞』1946年1月1日朝刊2面、使用図版はサンニュースフォトス『天皇』トッパン、1947年、p.31）



【図版10】
写真下は真綿のチョッキを縫う皇后と娘たち
（『毎日新聞』1946年1月1日朝刊1面）



【図版11】東京日劇に掲げられた大壁画
「撃ちてしまむ」1943年、原写真撮影・金丸重嶺、引き伸ばしを山端写真科学研究所が担当。
（山端庸介「百量敷大壁画写真 撃ちてしまむの制作苦心談を訊く」『寫真文化』26巻第4号、1943年4月、p.9）



【図版12】 撮影・山端庸介
「中国舟山群島 1940年」(『日本の写真家23: 山端庸介』
岩波書店、1998年、p.10)



【図版13】 撮影・山端庸介
「長崎1945年8月10日（炊き出しのおにぎりを持つ母と子）」(『日本の写真家23: 山端庸介』
岩波書店、1998年、p.36)



【図版14】 撮影・山端庸介
「長崎1945年8月10日（治療の順番を待つ母子）」(『日本の写真家23: 山端庸介』 岩波書店、
1998年、p.29)



THE CROWN PRINCE LEADS HIS SISTERS AND PARENTS PAST THE FLOWER-SHADOW PAVILION WHERE HIROHITO OFTEN MEDICATES

Sunday at Hirohito's Emperor poses for first informal pictures

The pictures on these pages are the first informal photographs ever released of the Japanese imperial family. They include the first picture showing a smile on the emperor's face, the first of the emperor with his children, the first of the family at a meal, the first of the emperor reading American comics.

For Japan, the photographs are unprecedented—battering and even more startling than the emperor's abandonment of his chain of divinity. Few of these pictures were published in the Tokyo press last month and caused a sensation. The Japanese imperial household had granted permission to LIFE as a "special honor" to use four Sundays in December photographing the members of the imperial family. Since the family is fearful of assassination, American photographers were barred and Japanese photographers of the San News Agency took

The photographs of Sunday at Hirohito's show how great a symbolic comedown the war has landed on Hirohito. The obvious intention of the Japanese in permitting them was to build the emperor as a man understandable to Americans. What happens to the future to Hirohito's status will not be particularly influenced by the facts that he is a middle family man, aged 44, neat and serious, methodical, thrifty, devout, with a strong voice and handshake and fond of his wife (a love shared by children and his mother, who was strongly opposed to the war). He admires Abraham Lincoln (see p. 78), as do many Japanese, who are taught more American history than many Americans. He has read the works of Longfellow and Whitman. His children, who resemble their mother more than him, always come together on Sunday. The two brothers with their grandmother at another palace,



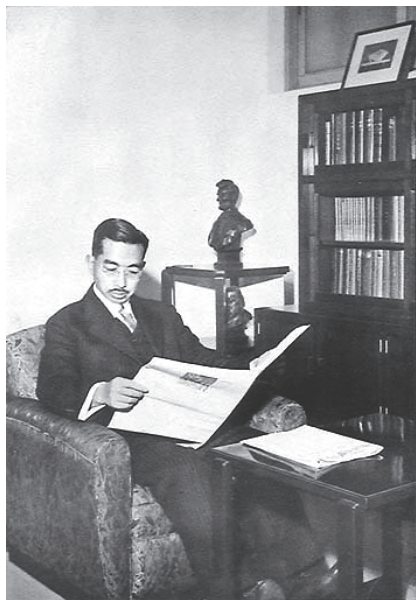
THE FUNNIES in the form of *Stripes* (Millsie and Max Mallory) are read by emperor to crown prince.

CONTINUED ON NEXT PAGE 75

【図版15】「ヒロヒト邸の日曜日——天皇、初めての非公式の写真にポーズ」
“Sunday at Hirohito's: Emperor poses for first informal pictures,” *Life*, 4, Feb. 1946, p.75.



【図版16】サンニュースフォトス「天皇 Emperor」
トッパン、表紙（1947年版）デザイン・亀倉雄策



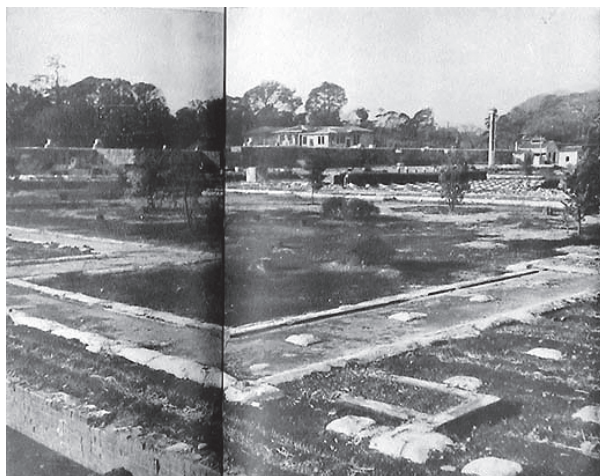
【図版17】書斎の天皇「陛下は座右にリンカーンとダーウインの像を置いておられる…」
（『天皇 Emperor』トッパン、1947年、p.13。
以下図版18～22も同様）



【図版18】『スターズ・アンド・ストライプス』を読む
天皇と皇太子、p.43.



【図版19】
植木の世話をする天皇、p.45.



【図版20】空襲で灰燼に帰した宮城焼跡、pp.58-59.



【図版21】 群衆に埋もれる天皇（右下の矢印の先に天皇）、pp.80-81.



【図版22】 1946年11月3日新憲法公布で「日本国民統合の象徴」へ、p.84.



【図版23】 「人波にもまれて動けぬ陛下」(『朝日新聞』1946年10月23日朝刊2面)



【図版24】 「祝賀大会の都民に埋まつた陛下、二重橋前にて(円内に陛下) (キャプション) (『朝日新聞』1946年11月4日朝刊1面)



【図版25】「最近の天皇陛下——国民とむすぶ
地方行幸などに見る親愛感」
（『毎日新聞』1947年1月1日朝刊2面）



【図版26】「楽しみはお孫さま
——“人間の自由”に寛く御日常」
（『朝日新聞』1950年1月1日朝刊7面）



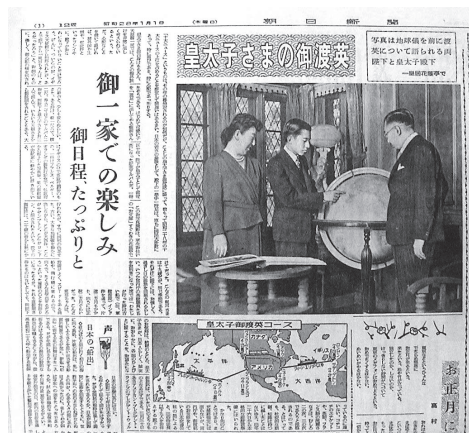
【図版27】白馬の皇太子と地上から見上げる天皇の写真
（『毎日新聞』1950年1月1日朝刊、元旦附録の写真つき
カレンダー）



【図版29】「天皇ご一家の春」
（『毎日新聞』1952年1月1日朝刊7面、写真キャプションは「右から両陛下と順宮、皇太子、義宮、清宮さま」）



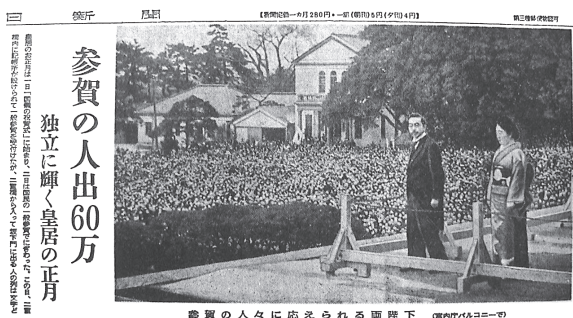
【図版28】「ことし成人式の皇太子さま」
（『毎日新聞』1951年1月1日朝刊2面。居間でニュース
ウィークを読む天皇と電気蓄音機をかける皇太子、微笑
む皇后。写真は、日本輿論調査研究所「天皇」p.228）



【図版30】「皇太子さまの御渡英 御一家での楽しみ」
（『朝日新聞』1953年1月1日朝刊3面）



【図版31】「続々と二重橋を渡る」——初めての国民参賀（『毎日新聞』1948年1月3日朝刊2面）



【図版32】「参賀の人々に応えられる両陛下（宮内庁バルコニーで）」——独立後初めての新年一般参賀（『朝日新聞』1953年1月3日朝刊7面）



【図版33】1956年



【図版34】1955年



【図版35】1958年



【図版36】1960年



【図版37】1961年



【図版38】1980年

【図版33～38】『朝日新聞』1月1日朝刊掲載の天皇ご一家写真。掲載年のみ記す。



【図版39】2006年元旦の天皇ご一家
(宮内庁ホームページより、図版40も同様)



【図版40】2014年元旦の天皇ご一家

The Construction of the Visual Representation of the Imperial Family and
Reconstitution of their 'Public and Private' Images: 1946-1955

Megumi KITAHARA

This article examines historically the visual representation of the imperial household from the perspective of gender during the early occupation period, 1945-1947. Given the crisis of the emperor system after Japan's defeat in war, the article analyzes the reconstituted physical representation of the emperor and his family, as well as representational mediums such as the newly created "visit of the general public to the Palace" and the "imperial family" portrait. The shock of Japan's defeat threatened to unravel the boundaries of the emperor's gender. At this time when the imperial image wavered greatly, what was the physical image of Emperor Hirohito who was on the verge of a crisis? The establishment of new imperial garb inherited from the prewar image of the commander in chief, and the image of a "human emperor" wearing a suit and surrounded only by female family members in a photograph taken on New Year's Day, 1946, can both be understood as a political construction based on gender, given the political context of the contemporary debate over the continuity and status of the emperor. This photograph of the "human emperor" and its confusing gender was photographed and disseminated as part of a joint US-Japanese effort. Those who took the photograph were photographers and technicians who during the war were at the forefront of producing national propaganda in support of the war effort.

The photograph of the emperor, empress, and the crown prince sitting in a circle appeared on New Year's Day after the occupation when Japan regained its sovereignty, introduced for the first time as the "imperial family" portrait. On the other hand, the public appearance of the emperor, who had energetically embarked upon his imperial tours throughout Japan, was originally referred to as the "visit of the people to the Palace" in 1948 and then the "visit of the general public to the Palace" from 1953. The blessing of Japan regaining independence and its determination to return as a member of international society was completed by the (re-) construction of the image of the "imperial family" portrait and the "public and private" representation of the imperial household. By

constructing the representation of the “public and private” of the imperial household and distinguishing the boundaries between the two, court rituals were able to survive as the “private affairs” of a family’s traditional customs. However, the icon of the “imperial family” portrait, which visualized the imperial succession that has been limited to male family members from the father to the son since the Meiji period, can be said to be in a transitional phase today.